
これってホントにポケモンすか！？

神技

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これってホントにポケモンすか!?

【Nコード】

N3524G

【作者名】

神技

【あらすじ】

この物語は主人公（通称）ではなく、ライバル（通称）視点でお送りする八チャメチャなポケモン小説です。 みんなのキャラがかなりぶっ飛んでいますので悪しからずご了承下さい!! m (<>) m ちなみに、「これポケモンいらねえだろ!？」とか”こんなのポケモンじゃない!!” って方々は回れ右! 右向け左! でお願います!! m (<>) m ……正直、間に合いませんでした!! ごめんなさあああああああ!! m (<>) m つーことで、引き続き手直し中!!

S O プロローグ（前書き）

小説家になろう様の様々な小説を読みまくって勉強しましたが、実力はまだまだなので、頑張って書いて行きますのでよろしくお願ひします！：m（<>）m

では！！

S O プロローグ

この世界には様々な姿、属性、技を持った不思議な生き物、通称ポケットモンスター縮めて”ポケモン”と呼ばれる生き物が住んでいる世界である。

そしてここは、カントー地方の”マサラタウン”。

その、マサラタウンにある左側の家、通称”主人公の家”に住んでいる少年から物語は始ま・・・

らなくて、その反対側の家、通称”ライバルの家”から物語は始まる・・・

SO プロローグ（後書き）

ちなみに「SO」の「S」はSTORYという意味です。

S 1 旅立ちの日(前書き)

今回はこの物語の主人公視点です!!!

S 1 旅立ちの日

チチチチ…… チュン… チュン…

（ライバル（本作の主人公）の家）

む、朝か…

「そういえば今日から旅立つのだったな……」

まずは荷物を確認しよう。

バッグよし、ハンカチよし、ちり紙よし、タオルよし、その他よし。

む？ 何故その他なのかって？

そんなもの面倒くさいからに決まってるだろ。

……む？ 我が誰かって？ そういえば自己紹介を忘れていたな。

私の名は狩牙^{かりが}。性別は男だ。

む？ 変な名前だと？

我もそう思うが、なにか？

む？ 何故自己紹介がそれだけなのかって？

……直にわかる。

「カーリー！ 飯だよー！ 早く来ないとアタシが食うぞー！！」

ちなみに、ここは二階で、この声は我の母のだ。

ちなみに、カーリーとは母だけが使う我のあだ名なのだが、なんとなく危ないような気がするのは何故だ？

「わかった。 今行く。 だから我の分まで食うな」

「あいよー！！」

「はあ……」

〜一階〜
（一階）

「あつ狩牙おはよー！！」

これは姉の葬霞だ。

む？ 何故二人とも変な名前なのかって？

これも直にわかる。

さて、飯を頂くとするか。

「いただきます」

「いっただっきます！」

「いただきます！」

ちなみに、上から我、姉、母だ。

～食後～

「ごちそうさま」

「ごちそうさまー！」

「ごちそうさまー！」

わかってるかも知れないが、上から我、姉、母だ。

～五分後～

腕時計して、コート着て、最後に荷物持って、…よし、行くか。

「では、行ってくる」

「気をつけてねー!」

……姉よ、我は旅立つのであって、遠足や遊びとは違うんだぞ？

そんなに軽くて良いのか？

「かなりの長旅だけど、カーリーなら（多分）大丈夫だから頑張っ
てきな!」

……母よ、我には聞こえないように”多分”と言ったのかも知れ
ないが、残念ながら聞こえたぞ。

まあ、いいか。

「さて、まずは研究所に行くか」

今日は私の旅立つ日なのだから……

S 1 旅立ちの日（後書き）

次回は主人公（通称）視点でお送りします！！

AS1 旅立ちの日(前書き)

ちなみに、サブタイトルの「AS」は「ANOTHER STORY」という意味です!!

AS1 旅立ちの日

謎の場所

……は？

……え？？

……マジで？？？

……一体全体どこだよここおおおおお
おおおおお！！！！？

いや、マジでホントに冗談抜きでここはどこですか！？

つかオレ、自分の部屋のベッドで寝てたはずなんだけど！？

なのに、何でこんなところに突っ立ってるんだよ！？

……とりあえず落ち着いて深呼吸しよう。

スーハー…スーハー…

ヒーハー…ヒーハー…

ヒッヒーハー…ヒッヒーハー…

ヒッヒッハー…ヒッヒッハー…

ヒッヒッフー…ヒッヒッフー…っておーい！ 途中から複式呼吸
吸になってんぞー！！！！

……落ち着けオレ…

（主人公（通称）が落ち着くまでドラビアン体操でもやってみよ
う）

いや、上のドラビアン体操って何だよ！？

うるさい。b y神技（作者）

はぁ！？

黙らないと俺自作の全自動空間落とし穴、【奈落へGO！】で地
獄に落とすZE？b y神技

……はい

んじゃ、さっさと進めろや。b y神技

……はい（泣）

はあ… やつと落ち着いた。

さて、落ち着いた所でとりあえず周りを見渡してみよう。

前見ても真っ暗、後ろ見ても真っ暗、横見ても真っ暗……

……。

斜め前後左右見ても真っ暗（開き直った） 上下見ても真っ暗

オレの人生お先真っ暗らんるー

ああ…何故か顔面真っ白で髪は紅く、パンチパーマの紅白縞々（こつはくしましま）道化師Dが謎の動きをしているのが頭に浮かんできた……

……ってトリップしてる場合じゃねえ!!

つーかいい加減ここがどこなのか教えやがれ!!

看板見ろ。by神技

はあ!?! 看板なんかあるわけ…………… ってあつたああああああ
ああああああ!!?!?!?

うるさい。 地獄に落とすぞバカ野郎。by神技

……はい（泣）

つーか”謎の場所”ってどこにあんだよ!?!?

四天王最初の一人の所にある入ってきた扉に”なみのり”したら
行ける。by神技

ネタバレすんな！！

みんな知ってるぜ？by神技

……マジで？

マジだ。by神技

……。

もしかして知らないのオレだけか？

残念ながら、そのようだな。by狩牙

！？ 何でお前が出てくんだよ！？

む？ 我はある者にお前を殺すように頼まれたから来ただけだ。

by狩牙

は！？ オレを殺すって！？ 何で！？ どうして！？ 何故に

！？ いつ！？ どこで！？ 何を！？ どうした！？

……パニクリすぎだ。by狩牙

あつたりまえだろ！？ いきなり”殺す”なんて言われたら誰だ

ってパニックるだろが!?

確かにまあ、そうだが…by狩牙

だろ!?! だかr

だが、我としてはさっさと帰りたいので……………殺させてもらう。
by狩牙

チャッ…(ナイフを出す音)

コッ…コッ…コッ…

や、やめる!?! く、来るな!?!

コッ…コッ…コッ…

やめる!?! やめてくれ!?!

コッ…コッ…コッ…

やめるやめるやめるやめるやめるやめるやめるやめるやめるやめるやめる
やめるやめるやめるやめるやめるやめるやめるやめるやめるやめるやめる
ロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメ
ロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメ
ロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメロヤメ
ロヤメロ……………

コッ…コッ…コッ…

……………終わりだ。by狩牙

あ……ああ……や……

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおお……！」

ガバッ！

ぐるぐるりん……！

ド……ーン！……！！

チュンチュン……チュンチュン……

「……夢かよ……ってか痛つてえええええええええ……！！！！！！！」

痛てて……叫びながら飛び起きて、更に勢い余って空中で2回転して、そのまま引力に従ってベッドから落ちるといって、もう二度と体験できないってかしたくないような珍技をやってしまったぜ……

……ん？ そういえばお前誰って？

……そういえば自己紹介忘れてたな（汗）

初めまして、オレの名前は神話（じゆわ） 信司（しんじ）。 性別は男。 よろしくな！

「……さて、飯食つか」

いっしょして、信司の旅立ちの日も始まったのであった……

AS1 旅立ちの日(後書き)

狩「・・・作者よ」

ん？ 何だ狩牙？

狩「何故、我の方(1ページ)は短いのに信司の方(3ページ)は長かつたんだ？」

え・・・えーと・・・それは・・・

狩「文章力が無いからだな」

・・・・・・面目無いです・・・

狩「まあ、まだ始まったばかりだからしょうがないか・・・」

・・・・・・はい(泣)

狩「さて、泣いている作者は無視して、この小説の評価や感想頼むぞ」

お願いします!! m (< >) m

狩「またな」

では!!

S 2 町で・・・(前書き)

突然ですが、読みやすいようにちょっと書き方変えてみました!!

S 2 町で・・・

（狩牙視点）

現在、町を歩いている狩牙だ。

……む？ 何故、書き方を変えたのだった？

そんなの我が知るわけないだろ。

「あつ！ おつはよー！ グラコロ！ ジュース買ってきて！」

「……朝からパシらせようとするな」

ちなみにコイツは、我に”グラコロ”というあだ名を付けた幼なじみの百合だ。

……む？ 何故、百合からのあだ名は”グラコロ”なのだった？

……直にわかる。

それに……旨いだろ？ ックのグラコロバーガー。

そういえば、前々回にカーリーは母だけしか使わないあだ名と言っただろ？

……最近、何故か2人ぐらい増えた気がするが…

「グラコロー？ 一体誰に話かけてるの？」

……言い忘れてたが、百合は読心術が使えるらしい。

だが、本人は自覚がないので、人々が沈黙していても、百合には何かボソボソ喋ってるように感じるらしい。

「……いや、何でもない」

「ホントー？」

「本当だ」

チャリリン…

「じゃあ、ジュースお願いねー！！」

「ああ！ 待てー！！」

「待ったないよーだー！！」

「……やられたか……」

チャリ…

「……おっと、こんな事をしている場合じゃないな。早くじいさんの所に行かなくては……」

ただし、かなり改造したのでメールや通話などは一切できないぞ。

ちなみに何故、こんな物が作れたのかは……企業秘密だ。

……む？ 何故、こんな名前なのかって？

……百合が名付けたからな……

さて、とりあえず”3分前”と入力するか……

……む？ 出たか。

「……ほう。なかなか面白い起き方じゃないか」

これはもう二度と見れないからな、保存しておこうか。

「さて、十分に暇をつぶしたのでそろそろ行くか……」

↳大城戸博士と研究仲間達のポケットモンスター研究所（カントー地方にしか無い素敵な研究所）↳

……上の異様に長いやつは一体何だ？

いや、今はそれよりかじいさんを探さなくては……

……む？ あれは名も無き研究員Aか？

「すまないが、じいさんはどこにいるのだ？」

「あつ、狩牙君、博士は今は留守ですよ」

名も無き研究員Aが言った。

「名も無き研究員A” って酷くないですか!？」

「何の事だ？」

「いや、何でも無いです……」

「……そうか」

……ならば一旦草むらにでも行くか。

……後ろから聞こえる” どうせわたくしなんかただのしがない名も無き研究員Aですよ……” と言う嘆き声は無視して……

S 2 町で・・・（後書き）

狩「今回は一応長かったな」

が・・・頑張ったからな・・・（疲）

狩「お疲れだな」

あ・・・ありがと・・・（バタツ）

狩「またな」

で・・・では・・・（チーン・・・）

S 3 じいさん大暴走（前編）（前書き）

・・・頑張りました。

S3 じいさん大暴走（前編）

～1番道路～

～グラコロ視点～

……作者よ、～ 視点～の時くらいは”狩牙”にしてくれ。

あいよ。by神技

～狩牙視点～

さて、気を取り直して、現在1番道路にて”コラッタ”という名の赤目紫ねずみ達と戯れている狩牙だ。

……む？ あの、1番道路一歩手前に立ちふさがって、”くさむらばあぶないからはいつちやダメだよ！”とかほざいている”考え中～”とか言いながら出て来て、”終わり”とか言いながら去って行く某教育番組のキャラクターに似ているクソガキMEGANEはどうしたって？

MEGANEなら、我がじいさんを探しに出ようとしているにもかかわらず、あまりにもしつこかったので…瞬時に近づき、ヤツのメガネを外してやって、そのまま左斜め後ろ45°に秒速300kmで投げてやったら”メガネがあ…メガネがああああああ…”と某大佐の如く叫びながら走り去っていったぞ？

ちなみにこの動作には2秒もかかってない。

母なら秒速3000kmは出せたな…

我もまだまだひよっこか…

…む？ 十分速いだろうって？

…姉でも1000kmは出せるのだぞ？

それを考えたら、我なんてまだまだひよっこだ…

…おっと、そろそろ本編に戻らなくては。

…戻ったか。

…さて、早く物語を進めなくてはな。

…さて、現状を説明しようか。

現状1 所々草むらが生温かいナニカで紅く染まっている。

現状2 たくさんの赤目紫ねずみが、紅く生温かいナニカを流しながら白目を剥いて地に伏している。

現状3 そして私の右手が生温かいナニカで紅く染まっている……

……？

……”私の右手”……？

「……また殺^やってしまったか……」

……これは私の悪い癖で、敵意がある奴に襲いかかされると体が勝手に動いて、相手を殺^やってしまうのだ。

だが、何故か紅く染まっているのは右手だけだ……

……無意識でも襲いかかればこうなる。

……だが、意識的に殺^やったのはたった5匹だぞ？

ちなみに、”それでもダメだろ！？”というようなツッコミは――

切受け付けないぞ。

「さて、そろそろじいさんを探るか……………む？」

……………

「うわぁー！？」

ビュン！！！！

男Aが風圧で飛ばされる。

「きゃぁぁぁー！？」

ファサ……

娘Bのスカートが捲れる。

……………

「アレは何だ！？」

子供Cが言った。

「車か！？」

子供Dが言った。

「いや、電車だー!!」

子供Eがボケる。

「いや、アレはジェット機よー!!」

子供Fもボケる。

「……いや、アレはポケモンだー!!」

子供Gが言った。

「おおー!!」

子供CDEFが納得した。

「ふっ……」

子供Gはカッコ付けた。

「いや、みんな全然違うだろ!!……!!? そしてG、かつこ
つげんな!! アレはどっからどう見ても人間だろ!? しかも、
かのオーキド博士だよ!!」

真面目な子供Hのツッコミ!

「……確かに」

子供CDEFGは納得した。

「これで54回目だぞおおおおお………」

「ならば、今度帰って来た時にもう一回突っ走って行ったら」55
回目”じゃな」

「……しまったあああああ………」

「H A H A H A H A H A」

……相変わらず元気過ぎるな……じいさんは……

S3 じいさん大暴走(前編)(後書き)

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

オ「イイツヤッツホオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!」

狩「いい加減にしろおおおおおおおおお・・・」

・・・・・・・・哀れグラコロよ・・・(汗)

次回・・・グラコロ達はどこに行くのか!?

お楽しみに!!

S 4 じいさん大暴走（後編）（前書き）

頑張って連続投稿してみました！！

〜グレン島〜

「準備はいいか？ 少年よ」

グレンジムのジムリーダー、カツラが挑戦者にそう言った。

「……はい!!」

挑戦者：エリートトレーナーKが返事をする。

ババババババババドドドドドドドドドドドドドドドドドド……

「よし！ 行くぞ少年!!」

「絶対に負けません!!!!」

両者は腰のベルトからボールを取って構える。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド……

「行けっ！ ブーブ」

カツラが構えたボールを投げようとしたその時!!

ドドドドドド……バツカアアアアアン!!!!!!!!!!!!

「やっほーカツラン ひっさしっぶりーー」

「^{オキド}ヤツが来た……」

「……久しぶりだな」

「……またお前か…… もう何十回も言うが、後ろの壁をぶっ壊すでないー！！ それと、カツラン言うなー！！」

「……えーと……ふっ」

エリートトレーナーKはいきなりの事で混乱している！

「えーーー」

「”えー”じゃないだろー！！」

「”えー”ではないっー！！」

「……あん」

「だって足が止まんなかったんじゃもんー！！」

「いい歳して語尾に”もん”をつけるな」

「……すみ」

「……はい……」

「それでよい」

「……もう帰ってやるもん」

無視され続けたエリートトレーナーKは帰ってしまった。

「……さて、オーキドよ……さっさと後ろの壁を元通りにしろ……！」

だが、3人はその事に全く気付いていない！？

「やgg」

「……ちなみにじいさんに拒否権、逃避権、基本的人権はない……」

「……いや、いくら何でも”基本的人権”だけは奪ってやらないでやってくれ……」

「拒否する」

「……即答ってヒドイな……」

「……それで……じいさんよ、やるか、殺られるかどっちがいい？」

「やりますやらせて下さい狩牙様あ」

オーキドはグラコロに泣きついてきた！

「それでいい」

↳5分後↳

「……はぁ……はぁ……やっと終わった……」

「(´)苦勞」

「……はい……」

「……さて、研究所に戻るか」

「気をつけるんじゃぞ!！」

……色々あったが、とりあえずは一件落着だな

↳戻って、大城戸博（以下略）↳

”大城戸博”まで来たのなら”土”も入れてくれ!!

それと、”大城戸博”ってじいさんの何を博覧するんだ!？

……まさか……じいさんの（バキューン！！）やら、（ズキューン！！）（やら、（ドキューン！！！！）で更に、（ズギユギユギューン！！！！！！）まで博覧出来るのか！？

……って我はナニを考えているんだ！？

そのような馬鹿な考えは闇に葬り去るんだ！！！！

「はあ……」

……その時！！by神技

「ああー！ チクショーー！！ 何か知らねえがヒドイ目にあつたぜ……」

「こらー！ グラコロ、ジューズ早く買ってこーーい！！！！」

……この物語で最も不幸なヤツと幼なじみの少女が来たby神技

「えっ！？ それヒドくね！？」

黙れby神技

「...」

S 4 じいさん大暴走（後編）（後書き）

やったああああああああああああああ！！！！！！

狩「どうした？」

今日つっつかさつき、何年か前になくした「ポケモンクリスタル」を久しぶりに探してみたら、見つかったんだよ！！

狩「・・・よかったな」

つしやらああああああ！！　これで小説の続きが書けるぜええええええええ！！！！！！

狩「・・・うるさい」

評価・感想心よりお待ちしてます！！
では！！

狩「・・・無視か・・・」

AS2 信司の災難（前書き）

これは、グラコロがオーキド博士といっしょに（無理やり）海の上を全力疾走している間、信司は何をしていたのかという話です！！

AS2 信司の災難

くマサラタウンく

く信司視点く

「ううう　まだ背中が痛てえ……」

よお…今、家を出たばかりの信司だ…

「あっ！　信司おっはよー！」

「……おはよ

コイツは幼なじみの百合だ…

えっ？　もう知ってる？

……なら、百合が”読心術”を使えるのは？

えっ？　これも知ってるのかよ…

……暗殺くろころのヤツ……　オレにも幼なじみの紹介くらいさせてくれ
よ……

……つてええ！？ 暗殺が誰か知らねえの！？

……まだ、アイツの”名字”知らなかったのか…

えっ？ アイツ”直にわかる”しか言わなかったのか！？

なら、教えてやるよ。 アイツのフルネームは”暗殺 狩牙”だ！

……まあ、アイツは”一応”平和主義者だから、この名字があまり好きじゃないらしいけどな。

……つて勝手に教えてよかったのか？

……何か後でヒドイ目にあいそうな予感が…

「」名答 by 神技

つてはあ！？ マジかよ！！？

マジ by 神技

……はあ

「なんか元気ないけどどーしたのー？」

「……いや、何でもねえよ…」

「ふ〜ん…」

「な、何だよその、”怪しい…”的な目は

「怪しいから怪しく見てるだけよ」

そうかよ…

「そういえば、さっきグラコロに会ったよー！」

「えっ！？ 暗殺に会ったのか！？」

「うん！ ジューズ代渡して、買いに行かせたよー！」

……朝からパシリに使ってやるなよ…

「そういえば暗殺はどこ行ったんだ？」

「んー…多分”草むら”だと思う。さっきMEGANEの悲鳴が聞こえたからね」

……”悲鳴”って…一体何したんだよ暗殺…

メガネ取って投げただけです（秒速300kmで）

さて…暗殺を探しに”草むら”に行くか…

～1番道路～

ザッザッザッ…

はぁ…あの、某教育番組のキャラに似ているうざったい少年”MEGANE”がいなかったから簡単に行けたぜ…

つかマジで暗殺はMEGANEに何をしたんだ…？

ザッザッザッザッザッ…

「はぁ…多分もうアイツいねえな…」

アイツは現在オーキド博士といっしょに（無理やり）海の上を全力疾走中です

ザッザッザッザッザッザッザッ…

「はぁ…一通り探してもいないから、一旦町に戻って博士ん所行くか…」

ザッザッザッザッザッザッグチヨ…

……………グチヨ???

「は？」

よく、周りを見てみると……

ポツポCが聞いた。

「ポ（訳 多分アイツが叫んだんだと思う）」

ポツポDが答えた。

「ポポポ…？（訳 俺の安眠を邪魔する命知らずは何処のどいつだ…？）」

口調がヤヴァイポツポEが寝起きにそう言った。

「ポ、ポポ！？ ポツポクルポ！？（訳 ポ、ボス！？ いかげなさいましたか！？）」

ポツポA B C Dは恐れている！

どうやらポツポEはボスのようだ。

「ポツポポツ…（訳 どうやら、俺の安眠を邪魔する命知らずがいるようだな…）」

ボスポツポがそう言った。

「ポツポ、クルクツ（訳 それなら、アイツが何かしら叫んでいたようですよ）」

ポツポDが信司を羽で指（？）差しながらそう言った。

「ポ… クルポツ！！（訳 そうか… よし、お前ら殺っちまえ！

！」

ボスポツポはポツポA B C Dに命令した！

「クルツポー！！！！（訳 イエッサー！！！！）」

バサバサバサバサバサバサバサバサバサバサ……

ポツポ達は敬礼をした後、飛び去っていった。

「クククク……ポルポクルク……（訳 くくくく……これであの命知らずは終わりだな……）」

ボスポツポは何か危ない事を言っている！？

視点を戻して……by神技

サ……
バサバサバサバサバサバサバサバサバサバサバサバサバサバサバサバ

ん？

「何だ？」

「ポポツククルポー！！！！（訳 お前が叫んだからボスが起きちゃったじゃないか！！！！）」

ポッポA B C Dは怒鳴っている！

……何て言ってるんだよ……

「うるせえ！！！！ ポケモンの言葉なんかわかるかよ！？」

「ポクルツ！！！！ ポポポクツ！！！！ クルポルクツ！！！！
！（訳 うるさいっ！！！！ わからなくなっただっていいわ！！！！！！
とにかく覚悟しやがれ！！！！！！）」

ポッポA B C Dは再び怒鳴っている！

つてええ！？ お前ら人間の言葉わかんのか！？by神技

「ポポック！！！！（訳 わかって悪いか！！！！！！）」

ポッポA B C Dは何もない空に向かって怒鳴っている！

……いや、悪くないけどby神技

「ククツ！！！！（訳 ならよし！！！！！！）」

ポッポA B C Dは再び何もない空に向かって言った。

「な……なんかヤバイ気がするから逃げるか……」

ガサツ！！

「……………」

……………オレ…何かしたか???

バタツ……………

その後、ボロボロのボロ雑巾になった信司は、2時間後に目が覚めるまで誰にも起こしてもらえなかったらしい……………

信司がやられる30分くらい前、すでにMEGANEが戻ってきていたから誰も助けに行けなかったからWW

「いや、それヒドイよ!?!」

黙れバカwwby神技

「……………」

A S 2 信司の災難（後書き）

その後、百合と再開して百合に手当てをしてもらってからいっしょに研究所に行ったみたいです！！

S 5 パートナー選び（前編）（前書き）

勝手ながら、”金曜日”と、”土曜日”は投稿をお休みする事にしました。

昨日、”何で来ないんだろ？”と思った方々、どうもすみませんでした!! m (<>) m

S 5 パートナー選び（前編）

（オーキド博士のポケモン研究所）

（狩牙視点）

「ああー！ チクショーー！！ 何か知らねえがヒドイ目にあつたぜ……」

「こらー！ グラコロ、ジュース早く買ってこーーい！！！！！」

「おお！ 来たか信司！！ ……って百合ちゃんも来たの！？」

「………何で百合も来たんだ…（ボソツ）」

………現在、じいさんの研究所にいる狩牙だ。

普通、原作やゲームならば、これから”ポケモン図鑑”をもらい、パートナーになる”ポケモン”を3匹の中から1匹選べるのだが…

「グラコロ聞いてんのかー！！！！！！！」

「あ…ああ……」

………どうやらまだ流れる的に無理のようだな…

「ま…まあ、とりあえず百合ちゃんもそこにならんでならんで」

「はーい…」

…と思っていたら、じいさんがアツサリ流れを変えただど!?

や…やるなじいさん…

「ゴホン！ ゴホゴホッ！！ ウエツホン！！ ウエツホウエツ
ホ！！！！ ……ゴハア！！！！！！？」

べしゃっ…

博士吐血。by神技

「……ってじいさん大丈夫か！！！！？」

「大丈夫ですか博士！！！！？」

「ちょっと!? 博士大丈夫！！！！？」

「な…何とか大丈夫じゃ…」

”いつもはドラマとかによくある”血糊”だが、今回は”本物の血
”みたいだな…”

「はあ…よかったぜ…」

「ホント…ビックリしすぎて心臓が飛び出て、グラコロに当たるか
と思ったわ…」

……百合よ…それはないだろ…

「ゴホン！ さ、さて、気を取り直してみんなに”ポケモン図鑑”
配るぞー！！！！ 百合からどんだんに回して行けー！！！！！」

「あ、あのー博士、オレ達3人しかいん」

「問答無用じゃー！！！」

「い、いや…s」

「黙って回せバカ」

「グラコロもひでえよ…」

……いつも思うが、何故我がいない時は”暗殺”で、我がいる時
は”グラコロ”なんだ？

……確かに”暗殺”という姓は好いてはいないが

「回ったかー！！！！？」

「YES、ボスー！！」

グラコロと百合が敬礼する。

「いや、何故に2人とも返事がどっかの組織風なんだよ!？」

「黙れ空気読めないバカ」

グラコロと百合の2人で信司に言った。

「いや、空気も何も関係ねえだろ!？」

「黙れ」

グラコロと百合とオーキドが言った。

「……はい」

何故かじいさんも混ざっているんだが…

まあ、いいか。

「ポケモン3匹用意したから早く選ぶのじゃー!」

「待て、じいさん」

「何じゃ? 孫よ」

「とりあえず、選ぶ前にその3匹を我に観察させてはくれないか? その方がより良いパートナーを見つけやすいだろうからな」

「おお、そうじゃな! では、頼むぞー!……!」

……さて、まずは左のポケモンからだな。

ボールを投げる。

ポンッ！

「こ…コイツはまさか…!!」

我が見たポケモンは…コイツだ。

1

2

3

『オレサマは天下のトランセル』

防御は任せろ”硬くなる”』

今日も明日も”硬くなる”』

それ！硬く、硬く、K A T

A K U N A R U 』

「……何故”トランセル”なんだ…」

……む？ 何故コイツ（トランセル）の喋った（？）事がわかったのか？

どうやら我には、”ポケモンの言っている事がわかり、心からポ

ケモンに喋りかけることができる”という”能力”があるらしい……
ちなみに”能力”は”暗殺の血を持つ者”なら誰でも持っているらしいぞ。

例えば、姉は”瞬間移動”ができる能力、母は”触れたモノを粉々に粉碎”してしまう能力、そしてじいさんは…知らないな。

『おー！！ ニーチャン、オレサマといっしょに硬くなるぞZ E 』

「……さ、さて、次は真ん中のやつだな」

『オイオイ、無視かよニーチャン。もしかして、”虫”だけに”無視”ってか？ うまいなニーチャン！！ H A H A H A！！！！』

……ウザったいなコイツ

「戻れ」

ピーシユルルル…

『オイオイ、それh』

「次」

ボールを投げる。

ポンツッ！

「……またか…」

我が見たポケモンは…コイツだ。

1

2

3

『そ、そうだ！ 硬くなるんだ！！ 硬く、硬く、もっと硬く！！
！ ボクは硬くなるんだあああああ！！！！！！』

……トランセルの次はコクーンか…

「……戻れ」

ピーシュルルル…

『ひ、ひどいやー！！！！』

「この調子で行くと、次は…コイキングか？」

ボールを投げる。

ポンッ！

『ワタシは誰だ？ 何故ここにいる？』

何故最後の最後でミュウツーが出てくるんだ!!? ?

『オマエは誰だ? ワタシも誰だ?』

……ダメだなこれは…

「我は狩牙だ。そしてお前の名は…」

少しふざけるか…

『ワタシの名は…?』

「……”マサキ”だ」

『わ、ワタシの名は”マサキ”…』

「そつだ、”マサキ”だ」

『……わかった。ワタシは今から”マサキ”だ!!』

「……戻れ」

ピーシユルルルル…

『狩牙…ありがとう』

礼には及^おばん、ミュウツーもとい”マサキ”よ…

「……じいさん」

「何じゃ？ 孫よ、終わったか？」

「ああ、終わったには終わったが……」

「終わったが……？」

「何だこの3匹は！？ トランセルグーンコイキング 虫と虫と魚ではないか！！！！？」

ちなみに、ミュウツー（マサキ）の入ったボールはこっさりコイキングの入ったボール（そこら辺に落ちていた）とすり替えて私のリュックに入れておいた。

……もちろん後で逃がすからな。

序盤から強すぎるポケモンがいたらつまらないだろ？

「マジかよー！？」

「博士ひどーいー！ー！」

「ま……待ってくれ！ すぐ、いつもの3匹を用意するから！ー！」

（カップラーメンができる時間後）

……普通に”3分後”と言ってくれ

「よし！ 用意出来たぞー！ー！ー！ー！」

「はい！ー！」

「はーい！ー！」

「わかった」

さて、選ぶか…

S 5 パートナー選び（前編）（後書き）

次回、やっと3人のパートナーが決まります!!

狩「やっとか・・・」

ちなみにバトルもある・・・かも？（キ ナ風）

狩「”かも”か・・・」

では!!

S 6 パートナー選び（後編）（前書き）

ある評価を読んだ時に”鋼のハート”が砕け散ってしまい、そのダメージのせいではばらく執筆出来ませんでした…

待ってた方々すみませんでした！！！！m (<>) m&待っててくれてありがとうございます！！！！！！

S 6 パートナー選び（後編）

「オーキド博士の研究所」

「誰から選ぶの？」

「我は後でいい」

「なら、オレから選ぶぜ！」

「わかった」

何故か長い間時間が止まっていたような気がする狩牙だ。

「どいつにしようかな」

まあ、気のせいだろ…

「ゼニガメもいいけどな？ フシギダネも意外とグーだよな…
でもやっぱり、ヒトカゲか？」

「うるさい、さっさと選ぶ馬鹿」

「それひどくねー！？」

「お前がさつさと選ぶばいいことだろ」

「早くしてよ!!--」

「そ、そうだけどさ、普通迷うだろ?」

「いや」

「全く」

「マジすか!!--」

「驚いてないで早く選んでよ!!--」

「早く選べ」

「わかったよ...じゃあヒトカゲにするぜ!!--」

「カゲ!? (訳 ボク!?)」

「それで、名前は何にするの?」

「やっぱ”ーロ”だよな!!--」

「いや、伏せ字入った時点でダメだろ」

「カゲカゲ... (訳 それどっかで見ただことあるし...:)」

「じゃあ、マグM」

「 ヒート ” にしとけ

「 ……わかったよ。」

「 カゲヒート！…（訳 ” ヒート ” って何かカッコイイ！…）」

「 お前の名前はヒートな！ これからよろしくなヒート！…！」

「 カゲカゲーカゲー！…（訳 こちらこそよろしくね！…）」

「 次、私選びたい！…！」

「 好きにしる」

「 わーい！…！」

「 子どもか！？」

「 お前も我も子どもだろが！…！」

「 あっ…（汗）」

「 よし！この子に決めた！…！」

「 ダネダネー！…！（訳 やったー！…！」

「 ほっ…フシギダネか…！」

「早かったな！」

「だって、フシギダネってかわいいし」

「フツシ（訳 ありがとう）」

かわいいか？ はっきり言ったら殺されそうなので、口に出すのは止めておこう。

「そうか？ 全然かわいくないけど……」

はっきり言った馬鹿発見。

「信司？ グラコロ？ …… ちょっと来て？」

……む？ 何故我も？

「百合！？ 何か顔悪いよ！？ ってかオレをどこに連れてく気！？」

「百合！？ 何故、我もなんだ！？ …… はっ！ ……」

忘れてた！！ 百合が読心術を使えるというのを……

「ふふふふ……」

これはヤバイな……

「どっしする……？」

「……諦める」

逃げるのがダメなら戦うまでだ!!

「2人共覚悟おおお!!!!!!」

「フシギダネがかわいいかわいくないぐらいで暴れるンギヤアアアアアアアアアア……」

バゴーン!!!!!!

「……つとー!!」

百合のドロップキックが馬鹿しんじに炸裂し、我はギリギリで避ける。

……ちなみに、馬鹿しんじは後ろの壁を突き抜けて逝った。

「グラコロオオオオ!!!!!!」

「はっ!!」

……トン

百合の渾身の”マッハパンチ”を左手で受け流し、首に手刀をおみまいする。

「あっ……」

パタッ……

「大袈裟過ぎだろ……」

「カゲ…（訳 大袈裟過ぎるよ…）」

「ダネ？（訳 何が？）」

「……カゲ…（訳 ……もういいよ…）」

「………」

さつさとポケモン選ぶか…

「とは言ってもコイツだけだな」

「ゼニ…ガメガ…（訳 力だ…世の中は力だ…）」

「……む？」

何だコイツは？ 普通では無いようだが…

「ゼニゼニ、ガメガ！？ ガメゼニガメガ（訳 愛がだろうが金だろうが、結局ポケモンは力なんだろ！？ 力があればなんだって出来るんだろ！？）」

確かに力さえあればなんだって出来るが……それは違うな…

「ゼニ、ガメガメ！！ ……ガメ、ゼーニガメガメガ！！！！（訳 だったらオレは最強になって、みんなを見返してやる！！ ……そして、どんなものよりも”力”が一番大事だって知らしめてやるんだ！！！！！！）」

「…………それは違うな……」

「ゲーム!? (訳 テメエ…人間なのにオレの言葉がわかるのか!?)」

「ああ……」

「ゼニガ、ゲーム! (訳 なら、オレのどこが間違っているのか言ってみろ!!)」

「それは、我と一緒に来れば…いつかはわかるだろ……」

そろそろ”訳”がうざったくなってきたので、最初から訳しておこう。

『 ”いつか”…か…』

「そうだ、”いつか”だ。その”いつか”は、旅の途中かもしれないが、旅が終わった後かもしれないし死ぬ時かもしれない。”いつか”とは本当にいつかだな」

『 ……………』

「まあ、我は堅苦しいのは苦手だからな…気楽に行こうか」

『 ……………気楽に…か…』

「ああ…気楽にだ」

『……オレ……』

「何だ？」

『オレ……お前のパートナーになる。そして、その”いつか”わかるといって、オレの間違ってる所を知る……！』

「……わかった」

『おう……！……で、お前の名前は？』

「我の名は狩牙。暗殺狩牙だ」

『グラコロカリカリ？ 変な名前だな。』

「あの頃の百合とほぼ同じ反応だな……そして我は、グラコロカリカリではなく”くらころかり”だ」

『ゴメンゴメンww ちなみにオレの名はフウジロウだ……！』

「ああ、よろしくフウジ」

『いや、名前はグラコロに付けて欲しい』

「ああ……わかった」

パートナーになるポケモンからもグラコロと呼ばれるって……

「よし、決まった。今日からお前は”ゲバ”だ」

『オレは今日から”ゲバ”か… わかった、これからよろしくな！
グラコロー！』

「ああ、よろしくゲバ」

こうして、暗殺狩牙もとい”グラコロ”と、ゼニガメもとい”ゲバ”の長い長い旅が始まったのであった……

「痛ててて……」

馬鹿^{しんじ}帰還。

「グラコロごときが何すんのよおおお！…… グオオオオオオオオオオオオオオ！……！！」

百合^{ビーストアウト}… 獣化！？

「空気読め。 馬鹿共が」

『空気読みやがれ馬鹿人間共！…！』

S 6 パートナー選び（後編）（後書き）

”力”の部分で”金”にして読んで方っていますか？ W W

狩「何人かはいらるだろ」

だよな W W

S7 バトル!!…後、旅立ち(前書き)

ポケモン達の言葉は既にグラコロが訳していると思いつながりながら読んで下さい!! m (< >) m

後、かなり遅くなりました!!

S7 バトル！！…後、旅立ち

（オーキド博士の研究所）

パートナー選びが終わったので、3人でこれからどうするか話し合っていた狩牙だ。

話し合いの結果、我は1人でのんびり旅することに、百合と信司は2人でバッチ集めをする事になった。

「終わったか？」

じいさんが現れた！

狩牙Lv10

こつげき

とくぎ

ポケモン

どうぐ

フルボッコ

……何故、某RPG風？

しかも、”にげる”の代わりなのか知らんが”フルボッコ”は無
いだろ…

……とりあえず……

こうげき

とくぎ

ポケモン

どうぐ

フルボッコ

どうぐ

傷薬×10

いい傷薬×5

元気の欠片×5

役に立たな草(略して役草 薬草ww)

×5

ポーション

火薬草×10

ニトロダケ×10

大タル×10

拡散出目金×10

地雷×1

ファブリーズ×

核爆弾×1

閃光玉×5

ブーメラン×5

妖の瓶×3

グラコロツール

マサキ×2

……何だこのどうぐは!?

最初の3つ以外は他のゲームのだろ

!!

しかも、”役に立たな草(略して役草 薬草ww)”って何だ！
? どう使えと!?

ポー ヨンは定番(?)だからまあ、いいとして…モ ハン多す
ぎるだろ!! 大タル 弾Gでも作れと!?

しかも、大タル 弾G作らなくても地雷と核爆弾で終わりじゃな
いか!! 大タル 弾G意味ないだろ!?

というか、ファブ ーズそんなにいらないだろ!! そんなにた
くさん何に使うんだ!?

妖 の瓶って ルダか!? しかも、何故かマサキミュウツィが増える!?

……次。

グラコロツール

- N 0 1 何でもかばん
- N 0 2 フーズシート
- N 0 3 RSG ツクール
- N 0 4 機神鋸きしんのこ【きりきり斬刻】
- N 0 5 ????
- N 0 6 ????
- N 0 7 ????

……あつた。 後は…

「あつ、博士ー!!」

ちなみにさっきの脳内コマンドはツッコミ含め5秒で終わらせた。

「いつの間になっていたの!?!」

「どこ行ってたんだ? 返答次第で地獄に落とす」

きじんの機神鋸【きりきざみ斬刻】の刃をちらつかせる。

キラリ

「あ、ああ、ちょっとタマムシデパートでタイムサービスやってたから走って行ってきたのじゃが…」

「買い物かよ!?! しかも、走って!?!」

百合と信司のツッコミがハモった。

「それぐらい知らせてからにしろ」

「メンゴメンゴ」

……きじんの機神鋸【きりきざみ斬刻】のギアを入れる。

ドウルルルン…

「何だ!?!」

「何?この音?」

「何じゃ!?! ……つてま、孫よ?」

「何だ?じいさん?」

「……ソレは何じゃ?」

「我の”グラコロツールNo4 機神鋸【きじんのこ 斬刻きりきり】”だが?」

「何ソレ!? そんなんあったの!? 初耳なんですけど!?!」

また2人のツツコミがハモる。

「心配するな。お前らは斬らん」

「そうじゃなくて!?!」

またまた2人のツツコミがハモる。

「黙れ。お前らも斬るぞ?」

「……ひゃい」

今度は涙声でハモる。

「よし…行くぞじいさん!」

ギョアアアア…

「よし! 来い!」

「いや、何乗っちゃってんの博士!?!?」

偶然なのかまたまたまた2人のツツコミがハモる。 つーかハモり過ぎだ。by神技&ナレーター

その頃ポケモン達は…by神技&ナレーター

『誰だお前ら?』

『ボク、ヒート! キミは?』

『オレか? オレはゲバだ!! んで、お前は?』

『アタシはフロウ! よろしくね』

『よろしく!』

『よろしくな!』

『そういえば、ゲバの主人はクールでカッコイイね!』

『そうだな。でも、ヒートの主人もカッコイイじゃねえか!』

『そつ?』

『そつよ!』

『ありがとう!』

『フロウの主人はかわいいじゃねえか!』

『やっぱり?』

『うん! すっごくかわいいよ!』

『ありがとう』

楽しそつに自己紹介などをしていた。by神技

「ハッ!」

「甘い!」

ガキギギギ...

我が機神鋸【きじんのこ】きりざねを右斜め上から振り下ろし、じいさんが人差

し指と中指の間で刃を挟み、回転を止める。

「博士すごっ!!」

何故かハモる2人。

「こんくらいなら朝飯前じゃ」

「……そうすか……」

……アンタらいつまでハモってんだよ!! b y ナレーター

「チッ…ならば、これはどうだ!!」

ピュッ

懐にあった”うい棒【グラコロバーガー味】”を投げつける…
って間違えた!!

「こ、これは!?!」

パシッ

じいさんが”うい棒”をキャッチする。

”うい棒【グラコロバーガー味】”!!」

「何故にうい棒!?!」

……2人のツッコミがハモる。やる気なくした。

「チツ…今日のとこは「ねくら」にしてやるから…」返せ」

「ほい」

「あっさり返した!？」

2人のツツコミがハモる。やる気なし

「さて、そろそろ行くとするか…」

「切り替え早っ!?!? ってかちよっと待てよ!?!」

「何だ?」

「バトルしようぜ!?!」

「断る」

「即答!?!? ってか普通逆じゃね!?!?」

「確かに勝負仕掛けるの逆ね…」

「そこは気にするな」

「で、やるか?」

「だから、断る」

「やりなさいよ!?!」

「しょうがないな…一回だけだぞ?」

「それでもバトルできるならいいぜ!」

「わかった」

「ゲバ、来い!」

『おう!』

「ヒート!出番だ!」

『OK!』

「フロー!」

『はい』

「よし、みんなそろったところで外に出るぜ!」

「わかった」

「はい!」

〜広場〜

「みんな準備はいい？」

「大丈夫だ」

『いいぜ！！』

「ああ！」

『いいよ！』

「よし………始め！！」

「ヒート！」ひっかく”だ！！」

『わかった！』

「ゲバ、”ひっかく”が来る前に”たいあたり”で阻止しろ」

『任せろ！！』

『させないっ！』

『ハアアアア！！！！』

ドッ！

『くっ……』

ヒートの”ひっかく”が炸裂する前にゲバの”たいあたり”が炸

裂し、ヒートが怯む。

「ヒート！もっかい”ひっかく”だ！！」

『うん！』

「こっちも”たいあたり”で攻めろ」

『おう！』

『たあ！！』

『負けるかよ！！』

ガリッ！ドッ！

『ぐああ！！！！』

『くっ…やるな！』

ヒートの渾身の”ひっかく”がゲバに炸裂し、ゲバに大きなダメージを与える。

だが、ゲバも負けじと強力な”たいあたり”をヒートに炸裂させたので、ヒートは大きく吹っ飛び、広場の杭に激突し、大きなダメージを受けた。

「ヒート！大丈夫か！？」

『な…何とか…』

「ゲバ、大丈夫か？」

『ま……まあな……』

「……グラコロ」

「……何だ？」

「次で決着を付ける……」

「……わかった」

「だから、今覚えている最強の技で来い……」

「……わかった」

「ヒート！”げきりん”だ……」

『了解……』

「ゲバ、”なみのり”だ……」

『おうよ……』

『ウオオオオオオ……』

『ハアアアアア……』

ザザザザ……

「よし、もういいぞゲバ!!」

『わ…わかったぜ…!』

『ガアアアアアア!…!!…!!』

『受けてみやがれ!! 今まで我慢して威力を最大限まで高めたオレの最強の”なみのり”を…!!…!! ハアアアアアアアアアアアア!…!!…!!…!!』

ズザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザ……

ザッツバアアアアアアアアア……

『グガアアアアアアアアアアアアアアア!…!!…!!』

ゲバの最強の”なみのり”は自我を無くして暴れまわっていたヒートにクリーンヒットし、ヒートは地面に叩きつけられて、目を回して倒れた。更にヒートは水タイプが苦手な炎タイプなのでかなりの大ダメージを受けた。

「ヒート戦闘不能!! 勝者!ゲバ!!」

『やったぜ!!…!!』

「よくやった。 疲れただろ? よく休んでくれ」

『ボールは止めてくれないか?』

「何故だ？」

『言いたくない……』

「……わかった、止めておく」

『ありがとう！』

「さて、ヒートの所に行くか」

『ああ』

「ヒート！大丈夫か！？ ヒート！？」

『やりすぎちまったか？（汗）』

「今は気絶してるだけだから、大丈夫よ」

「そつだ、回復させればよい」

「言いながら”元気の欠片”を投げ渡す。

「これは…？」

「元気の欠片だ。早くそいつをヒートに使ってやれ」

「ありがとう！」

『……ん……』

「ヒート！よかったー！！（泣）」

『な…泣かないでよ…（汗）』

「泣くなよ…」

「マジでよかったああ！！！！（泣）」

『泣きすぎだろ…（汗）』

「と、とりあえず研究所戻って回復させよっか？」

「そっだな」

『おう！』

「うん…（泣）」

『まだ泣いてるし…（汗）』

↳研究所戻って

「さて、回復させたし行くか」

「行くぜ！！」

「そういえば、そろそろ行かなきゃね」

『おっ！！』

「ん？ グラコロ、何でゲバをボールに入れないんだ？」

「そういえば、そうね」

「ああ、ゲバはボールが嫌みただからな」

「どっその電気ねずみかつ！！」

「まあ、そう言うな」

「そかよ」

「そろそろ行くよー！！」

「わかった！！」

「ああ」

（1番道路前）

「さて、行くか」

『行くぜ！！』

「おじ」

「うん！！」

「ううして、
我らの旅が始まったのであった……」

S 7 バトル!!! 後、旅立ち(後書き)

何か書いてたら長くなってしまった(汗)

狩「我としては長い方が好きだが？」

そか。

狩「ああ」

ちなみに、ゲバの”なみのり”と、ヒートの”げきりん”は遺伝技です!!

狩「”なみのり”はカメックスからで、”げきりん”はカイリユーから遺伝させることができるぞ」

ちなみに俺のダイヤモンドには、なみのりゼニガメがいるから間違いないです!!

狩「”げきりん”はネットで調べたぞ」

皆さんも試してみてください!! では!!

狩「またな」

どうも、色々あって更新がかなり遅れた神技です…(汗)

狩「色々とは具体的に何だ？」

バイトしたり、宿題したり、小説読んだり、友達と遊んだり、ラジバンダリ！！

狩「バイトと宿題は仕方がないが…読む暇があったら小説書け！！」

そ…それはそうだけど…

狩「問答無用！！」

はい…

狩「小説更新をサボった罰として……斬る！！」

「殺滅奥餓！！」

「アースブレイカー」

『…ADR。』
アドル

いや、何でお前らまでいんだってギャアアアアアアアアアアアア
(ry

狩「まえがきなのに長くなってしまってますまん。 本編は短めなん

だが…」

「ちなみに俺達の技は神技のホムペに載っているから興味ある奴は探してみてくれ！！ 興味無い奴は読み飛ばせ！！」

「フフフ」

『…またね。』

く狩牙の家く

く葬霞視点く

おっひさー！ 葬霞よ！！

今回は滅多に無いわたし視点！！ やったあ！！

え？ 何でわたし視点なんだって？

それは作者の気分よ！！

「ただいま」

あっ！ 帰ってきた！！

「おかえりー！ ”どうぐ”の事でしょ？」

「な…何故わかった！？」

「アンタの事なんかお見通しよ！」

本当は作者から聞き出しただけなんだけどね！

「そうか…なら話が早いな 最初の3つ以外s」

” 全て他のゲームやらのアイテムだろ!?” でしょ?”

「そ…そうだが…最後まで言わせる!! それに…何だこの変な草は!?”

狩牙はそう言いながら”役に立たな草”をバッグの”どうぐポケット”から出す。

「ああ、”役に立たな草”ね。 それ、母さんがそこら辺から抜いてきた”ただの雑草”よ?”

「だから”役に立たな草”なのか!! ……と云うか”ただの雑草”を”どうぐポケット”に入れるな!?”

「わたしに言われても困りますう」

「ますう”とか言っな!! 姉が言っくと鳥肌が立つ」

「失礼ね!?!」

「それと…何だこの”大タル 弾G調合セット”は!?” 地雷と核爆弾がある時点で不要だろが!! ……まあ、これらと”閃光玉”等はこの先必要かも知れないので持って置くが…”大タル 弾Gセット”を入れるなら、せめて”調合書1〜4”くらいは入れたい欲しかった」

「欲しいなら早く言ってよ! はい、”調合書4”」

「いや、”調合書1〜3”が無ければ意味がないのだが…」

「その分重くなるわよ？」

「本当にいらぬアイテムは置いて行くので構わん」

「わかった。そういえば”ポー ヨン”はどうすんの？」

「後で母に”シャンパンファイト！！”とか言いながら掛けとけ」

何か古いわね…

「りょーかい！」

「それから、ペ シ N E X にメン スも仕掛けとけ」

狩牙も意外と悪戯好きなのかな？

「俐畏まりましたー俐！！（敬礼）」

「いや、何と言っている？ それと何故に敬礼？」

「”かしこかしこまりましたーかしこ”だよ？ 知らないの？ んで、敬礼してるのはなんとなくよ！」

「いや、知ってるが…漢字に変換したらそうなるのか…」

「多分ね」

「多分って何だ!？」

「気にしない!気にしない!」

「そうか…」

「そつよ!」

「……む!？ 忘れそうになってたが…何だこの”ファブーズ”の量は!？ 多すぎるだろ!」

「知ってる？ 今はどんなスプレーよりも”ファブーズ”が一番らしいわよ!」

嘘だけどww

「何!？ それは本当か!？ 本当なら持って行くが」

「うん、本当よ!」

「よし、持って行くわ」

ホントはそんなのありえないから嘘だけどww うまく騙されてくれたわww

「……む？ そついえば母はどこ行ったんだ？」

「え!？ 今頃気付いたの!？」

「そつだが」

「母さんなら”仕事行ってくる”って言いながらどっかに消えてったわよ？」

「そうか…なら母が帰ってきたら…頼む」

「OK!」

……ホントにやったら殺されるかもしれないってか殺されるけど…じいちゃんのせいにしてけば大丈夫ねw

「じゃあ、仕度が出来たので我は行ってくる」

「行ってらー!! ……つてあつ! ”妖の瓶”はどっすんのー
ーっ!？」

「む!？ 完全に忘れてた… 本当は置いていきたいが、とりあえず持っていく!」

「わかったー!! 気をつけてねー!!」

「ああ!」

（狩牙視点）

……む？ やつと私の視点に戻ったか…

『グラコ口遅えよ！！』

「ああ、すまん。 ちょっと姉と話していたので遅くなった」

『わったから早く行くこうぜ！！ みんな先行つちまったから早く追いつこうぜ！！』

「ああ、そうだな。 少し急ごうか」

『おう！！』

～1番道路～

「ゲバ、”体当たり”だ」

『おう！！』

急ぐと言いながらもレベル上げは大切なのでしておく我なのであった。

～今回の成果～

ゲバ Lv10に到達する。

ゲバ 泡 (LV6) & 殻に籠る (LV10) を習得する。

狩「作者よ、次回はいつ更新できるんだ？」

出来れば明日更新したい！！

狩「そうか。頑張ってくれ」

おう！！

狩「クロスの事もあるしな」

だな マジ頑張んなきゃな

「ちなみに”メン ス”+”コーラ”で炭酸が凄げえことになんの
知ってつか？ やってみてもいいが、気をつけるよ！！ じゃな！
！」

では！！

狩「またな」

S9 やつとトキワシティか…(前書き)

ども、神技です。

狩「狩牙だ」

今回から”前書き”は初代ポケモン(赤)の色々な曲に”歌詞”をつけてみたシリーズで、”後書き”は覚えてもムダだけど、なんとなくこう思う。のコーナーをやりたいと思います。

狩「まあ、くだらないがよかったら読んで歌ってやってくれ」

では、早速行きます!!

これは”マサラタウン”の曲を思い出しながら(もしくは聞きながら)読んで下さい!!

～はじまりの町～

ここははじまりの町

そして今日僕は旅立つ

ママに挨拶をしてお別れも言っとく

荷物を持って研究所に行く

博士は不在だから草むらへ

～二番～

ここははじまりの町

僕は今草むらにいる

そしたら博士やって来て僕を連れ戻す
研究所に戻りポケモンを貰う
凶鑑も貰いさあ出かけよう

〜三番〜

ここははじまりの町
僕は今研究所にいる
おいとましようとしたらアイツがこう言った
せつかくだからバトルしようぜ
だから僕はアイツをぶちのめし旅立った

〜四番〜

ここははじまりの町
僕は今アイツン家にいる
勿論タウンマップを盗みに来たんだよ
任務遂行したら見事に見つかった
僕は殺るならアイツを殺つてと言っとく

〜五番〜

ここははじまりの町
僕は今草むらにいる
沢山の難関に立ち向かいポケモンマスターを目指す
時には笑い時には悲しむ
でも挫けずポケモンマスター目指し旅する

以上!!! 本編どうぞ!!!

S9 やつとトキワシティか…

〜1番道路〜

「もういいだろ。 ゲバ、レベル上げ止めて先に進むぞ」

急ぐと言いながらもゲバのレベル上げをしていた狩牙だ。

とりあえず腹が減ったので、トキワシティで飯を食べようと思うんだが…

『おうー！… こんだけ殺ればもういいだろ。』

「いや、これは流石に殺り過ぎだ。 周りを見ても」

『ん？ …… つておわっ！？』

周りを見ると、草むらは”生暖かいナニカ”で紅く染まり、そこから辺には”生暖かいナニカ”を流しているたくさんの肉片の塊がゴロゴロ転がっていた

『…………こりゃあやべえな(汗)』

「これは確かにヤバイが、こうなったのはお前が”甲羅に籠ってばつかじやつまらねえぜ！！”とか言っつて甲羅から出てそのまま自分の甲羅の上に立って”甲羅サーフィンだぜ！！”とか言いながらど

こかの紅い帽子被ってオーバーオール着たヒゲオヤジの如く滑り回って”オレを止めてみやがれ！！”と言いながら無数の”赤目紫ネズミ”達を引き殺したからだろ」

『長げえよ…』

「うるさい、行くぞ」

『へーい…』

「ちよつとそこの少年。」

「何だ？ 我に何か用か？」

「私、”フレンドリイショップ”略して”FS”の社長、かいものだいじ買物大事と申します。あ、これ名刺です」

「別に略しなくてもいいと思うが… 何だこの変な名前は？」

「ああ、それは偽名です」

「偽名だったのか！？」

「はい。私は本名を知られるとちよつと危ないので、誰にも明かしてません」

「何をしたんだお前は！？」

「秘密でじつえます」

「……そうか。で、何の用だ？」

「ああ、すっかり忘れてました」

「忘れるな！！」

「まあまあ、怒らないで下さい」

「早く用件を言え！！」

「はい。まあ、簡単に言いますと”フレンドリイショップ”略して”FS”は本当に便利で旅に役立つ道具が何でも揃うお店ですから是非寄って下さい、ということですよ」

「わかった」

「あ、それと初めての人にはサービスとして物語の中編まで何とか役立つ”傷薬”をプレゼントしていますのでどうぞ」

「ああ、感謝する」

グラコロは”傷薬”をもらった！

「あ、それとポケモンを捕まえる時に使う”モンスターボール”略して”MB”を買う時も是非”FS”に寄って下さい」

「わかった」

「では、私はこれで」

ズムムム…

「地中に消えただと!?」 穴を掘る”も使わずにどうやったんだ!?」

実は”探検セット”を使っただけだったりするww(グラコロは探検セット”を知らないからなww)

トキワシテイ)

「やっと着いたか…」

『ああ、やっとだな』

「さて、飯を食べに行くか」

『飯だ飯だ』

「そのキミ! ちょっといい?」

「何だ?」

「キミ、芋虫ポケモンは二種類いるって知ってる?」

「いや、知らないが…」

「そうなんだ。じゃあ教えてあげるよ！ キヤタピーは緑色でY字の赤い触覚があつて毒が無いけど、ビードルには毒があるよ！それで虫ポケモンはね……」

何故か虫ポケモンについて語り始めたので、さつさと”ポケモンセンター”に行こうか。

くポケモンセンターイントキワく

ウーーン…

「ようこそ、”ポケモンセンター”へ！ ポケモンの回復をしますか？」

「ああ、それと食事も頼む」

「かしこまりました。では、そのテーブルでお待ち下さい」

「わかった。頼むぞ」

てんでんてれてん

「お待たせしました。今日のランチ（ポケモンフーズ付き）と先

程お預かりになったポケモンです。」「ゆっくりとじつぞ」

「ああ、ご苦労」

『グラコロー早く喰おうぜ!』

「ああ、そうだな」

『いただきます!』

「いただきます」

〜食後〜

『グラコローこれからどうするんだ?』

「ああ、とりあえず”フレンドリィショップ”に寄りたいんだが」

『わかったぜ!』

〜フレンドリィショップHEZTキワ〜

ガチャ

「いらっしゃーい！ お！キミもしかしてマサラタウンの狩牙君？」

「何故わかった!？」

「いやあ、オーキド博士からキミの事を聞いてるからね」

「じいさんからか…」

「そう。 んで、これ頼まれてんだけど…渡してくれるかな？」

「いいえ…いや、別にいいが」

「何だよキミ、ノリ悪いな。 まあ、いいや。 はい」

「ああ」

狩牙は”届け物”を預かった！

「じゃ、オーキド博士によろしくね…」

「わかった」

（オーキド博士の研究所）

「じいさん、届け物だ」

「おお、どーだ孫よ、わしがあげたポケモンは……ふむ」

「何だ？」

「完全にはなついていないみたいだけどイイ感じじゃな!!」

「そうか。で、受け取るのか受け取らないのかどっちだ？」

「ああ、受け取る受け取る」

狩牙はオーキド博士に”届け物”を渡した！

「おお！ コレは……」

「コレは……？」

「わしが特注した”モンスターボール”じゃ!!」

「よかったな。じゃあ我はこれで……」

「おお、またいつでも来てくれ」

「……止めとく」

「そうか……残念じゃ……」

「またな」

く再びフレンドリイショップイントキワく

「いらっしゃーい！ あ、もう届けてくれたの？ ありがとう！..!」

「ああ」

「そういえば、また来たって事は買物かい？」

「ああ、”モンスターボール”を五つ程くれ」

「”MB”五つで1000円です！..!」

「わかった」

狩牙は1000円渡して”MB”を買った！

残金が2175円になった！

「毎度あり！！ またの来店待ってるよ！..!」

「ああ、また来る」

く外く

「さて、これからどうするか」

『とりあえずレポート書こつせー！』

「わかった。………よし、行くか」

『おうー！』

〜今回の成果〜

ゲバ レV11になった！

狩牙 ”モンスターボール”を五つ買った！

S9 せつと下キワシティが…（後書き）

くなんとなくこころ思つて

”マサラタウン”の”マサラ”って”真っ白”をカタカナにして、

マッシロ マッシラ

マッシラ マッシラ

マシラ マサラ

と言つ風にして出来たんだとなんとなく思つ。

以上です。

S10 VS ポツポ(?) (前書き)

ども、小説を書くときポケモンの”赤”も一緒にやっている神技です!! 今回は1番道路の曲に歌詞を(無理矢理)つけました!!
どうぞ!!

〜連れてって〜

連れてってって

連れてってって

連れてってマジで

連れてってって

連れてってって

連れてってお願いします

連れてってって

連れてってって

連れてってくれや

連れてってってってってってってマジで

捕まえられた時は弱いけど

いつかは使えるようになるぞ

以上です!! では、本編どうぞ!!

S10 VS ポツポ(?)

～1番道路～

前回モンスターボールを買ったのでポケモンを捕まえようとして
いる狩牙だ。

『誰もオレに勝てねえのか!? 失望したぜ!!』

だが、ゲバが”オレと対等に戦える奴がいいぜ!!”とか言ってい
るのでなかなか捕まえられない。

『誰でもいいから掛かってこいよ!!!!』

そしたら…

『……俺の昼寝の邪魔をする愚か者はどこのどいつだ?』

……何か物凄くヤバそうなポツポが草むらから出てきた。

『このオレだぜ!!』

「ゲバ、アイツを挑発するな。 ……アイツは物凄くヤバイ」

『ハア? どこがだ?』

まず口調が変わる？ それにおもいつきり顔にキズがあるのに”
どこがだ？”は無いと思うが…

『そうかキサマか… 覚悟は出来ているな…』

『言われなくてもとつくに出来てるぜ！！』

「ゲバ、止めとけ」

『何でだよ！？』

『アイツ…かなり強いぞ… お前じゃ太刀打ち出来ない程な』

『そんなら本気で行かなきゃな！！ 燃えてきたぜえええ！！』

………死んでも知らんぞ？

「はあ…」

『逝く準備は出来たか？』

『おう！！ でも、逝くのはテメエだ！！』

『そうか…”鋼の翼”！！』

遺伝技です。

『だったらこっちは”波乗り”だ！！』

両者、大きくはないがダメージを負う。

『ほう…なかなかやるな』

『つたり前だ！！ オレは天下のゲバ様だぜ？』

……いや、それ聞いたの初めてだが…

「と言うか我の命令無しで技を使うな！！」

『別にいいだろ！！』

「今は良くないだろ！！」

『チツ…』

「はぁ…」

『俺を無視するな！！ ”風起こし”！！』

「ゲバ、”殻に籠る”だ」

『おっ』

ミス！ ゲバはダメージを受けない！

『甘い、”鋼の翼”！！』

「ゲバ、そのまま回れ」

『お、おっ』

『馬鹿が…そのまま真っ二つに斬ってやる…!』

「もっと速く回れ!」

『おっ!』

「アイツに斬られたくないならもっと速くしろ!」

『ウオオオオオ! 斬られてたまるかああ!』

『何!? 回転が速すぎて竜巻が起こったと!?』

「そのまま”体当たり”だ!」

『おっ!』

『何!? ぐああ!』

”殻に籠る”+”高速スピン”+”体当たり”で合成技”サイク
ロンシエル”が発動した! ポツポにかなりの大ダメージ!! ポ
ツポはたくさんの木々を薙ぎ倒しながら気絶した!

「ゲバ、アイツ捕まえていいか?」

『お…おっ…』

ゲバは回りすぎたらしく千鳥足になっていた!

「行け、モンスターボール!!」

パシユウ……ン

狩牙はポツポを捕まえた!

「名前は何にしようか……よし、コイツは”ボス”だ」

ポツポは何故か”ボス”と名付けられた!

「さて、一旦ポケモンセンターに戻るか……」

『お……おっ……』

くポケモンセンターイントキワく

「さて、回復もしたしゲバとボスのレベル上げでもするか……」

『おっ!!………つてかボスって誰だ?』

「さっき捕まえたポツポだが?」

『そかよ……(コイツ……ネーミングセンス無くな?)』

「おい、日が暮れる前に行くぞ」

『お、おっ』

〈今日の成果〉

ゲバ Lv15になる

”水鉄砲” (Lv13) 取得

ボス Lv10になる

狩牙 ポツポ”ボス”を捕まえる

S10 VSポツポ(?) (後書き)

〜何となくこう思う〜

ストーリーとはまだかなり関係ないけど、シェイミの名前の由来は中国語でありがとうと言う意味の”しゅいしゅい謝謝”にMe(私に)で”しゅい謝Me””シェイミ”だと俺は何となくこう思う。

ちなみに今回初めて出てきたオリジナル要素”合成技”は今後もいくつが出てきますので、よかったら楽しみにして下さい!!

狩

「ちなみに”合成技”のアイデア募集もしているぞ」

よろしくお願いします!! では!!

狩

「またな」

S 1 1 トキワの森? いいえ、大迷宮です。(前書き)

今回は作者のネタ不足により、“歌詞”のコーナーと“こう思う”はお休みです。

狩「歌詞”のコーナーはやらない方がいい気がするんだが…」

つーか”歌詞”のコーナー読んでる人いるかな?

狩「プラネットさんあたりが読んでるかも知れないぞ?」

そうだったら嬉しいんだけど…

狩「まあな」

では、本編どうぞ!!

S11 トキワの森? いいえ、大迷宮です。

〜2番道路〜

「やっと”トキワの森”に着いたな」

『どんなヤツと戦えるかワクワクするぜ!』

現在”トキワの森”に入ろうとしている狩牙だ。

我が小さい頃じいさんから聞いた情報によるとここにはあの”ピカチュウ”がいるらしい…これは必ず捕まえなければな。

グラコロはかなりのピカチュウ好きです。

「ゲバ、準備はいいか?」

『おう!…いつでもOKだぜ!』

「わかった。入るぞ」

『おう!』

「待って!」

お姉さんが話しかけてきた!

「何だ？」

『何だよ？』

「あなた達、”入ったら二度と出てこれられない…かも？トキワの大迷宮”に挑戦するの？」

「いや、”トキワの森”には入るが、そんなところには挑戦しないぞ？」

「いいえ、”トキワの森”自体が何者かによつて大迷宮にされてしまったんです」

「何！？ ソイツの名前は何だ？」

「えっと…確か”からくりなんちゃら”でした」

「そんな奴は知らない」

「そうですか」

「まあ、迷わないように気をつける」

「はあ…」

「またな」

「はい」

く入ったら二度と出てこられない…かも？トキワの大迷宮く

「何なんだこれは！？ 森のもの字も無いじゃないか…！」

これでは肝心の”ピカチュウ”が捕まえられないじゃないか…！

”からくりなんちゃら”め…見つけたら斬ってやるつか…

『お、おい、怒りで顔がヤバくなってるぜ！？』

「我は怒っていないが？」

『いや、顔コエエよ…』

「我はただキレているだけだ…！」

『キレてるのかよ！？』

「クハハハハ！… こんな大迷宮などぶっ壊してやるつか…！」

『グラコロが壊れた！？』

「おーい！ そのお前！ 勝負しろ…！」

虫取少年Aが現れた！

「ほう…そんなに我に斬られたいか。 覚悟はいいか…？」

グラコロは”勝負”の意味を間違っ
て捉えている!?

「ええ!?! 普通はポケモンバトル
じゃね!?!」

虫取少年Aのツッコミ!

「ああ、そうゆうことか…
ゲバ、相手して殺れ」

ミス! グラコロにツッコミは効
かない!?

『おう!! っ
てか漢字いらなくね!?!』

ゲバのツッコミ!

「そこは気にするな」

ツッコミはスルーされた!

『そかよ…』

「準備はいいか?」

「ああ」

『いつでも来い!!--』

「よし、行けっ!
ビードル!! ”毒針”だ!!--」

ビードルの”毒針”!

『そんなん効くかよ！！』 ”水鉄砲”！！』

ミス！ ゲバにはダメージをあたえられない！

ゲバの”水鉄砲”！

「かわして”糸を吐く”！！」

ミス！ ビードルにはダメージをあたえられない！

ビードルの”糸を吐く”！

『甘いぜ！！』 ”波乗り”！！』

ミス！ ゲバには当たらなかった！

ゲバの”波乗り”！

「ビードル！！」

急所に当たった！

ビードルは気絶した！

「くっ…負けた…」

『もう終わりかよ… 出直して来い！！』

「弱いな」

グラコロの”追い討ち”！

「クッソー！！」

会心の一撃！ 虫取少年Aはココロに大ダメージを受けながら70円グラコロに渡し、どこかに走り去って行った！

「はあ… かなりスッキリしたな」

『いや、コレはいくらなんでもやり過ぎじゃね！？』

周りを見ると”トキワの大迷宮”は壊れた機械やら砕けたプラスチックやらが散乱しているただの廃墟と化していた…

「まあ、これで出口がすぐわかるのでよしとする」

『オイ！？』

くその頃

「迷っていたと思ったたらいきなりワープするわ、壁がぶっ飛ぶわ、さっきまで道だった所が粉碎してるわ一体何なんだよここ！？」

「知らないわよそんな事！！ 大体森なのにポケモンが出ないなんてオカシイわよ！？」

”トキワの森”が”トキワの大迷宮”になってる事を知らないのか、頭の中が”？”でいっぱいになっている信司と百合が愚痴を言い合っていた。

何故二人がこの事を知らないのかお姉さんに聞いてみると…

「待って！」って言うてるのに止まってくれなかったから…」
だそうです。

～視点戻して～

「はあ…やっと”ニビシティ”に着いたな」

『やっとだな…』

「とりあえず”ポケモンセンター”で休むとするか…」

『おう！…！』

～今回の成果～

ゲバ Lv20になる（いつの間に!?!）

だが、進化はしてない（グラコロ曰く”Lv50まで我慢しろ”）

だとさ)

ボス レV15になる(お前も!?)

”電光石火”を習得する

狩牙 暴れまわっていた途中に偶然出てきた”ピカチュウ”を捕獲し、”ライザ”と名付ける(だから機嫌が良くなっていたのか!)

虫取少年から70円巻き上げる

ライザ 自分達の住処^{すみか}を”からくりなんちゃら”によって大迷宮にされてしまったため、他のポケモン達と一緒に森の奥深くに逃げていた。意を決してどこか遠くにみんなと逃げようとした時に”チェーンソーを持って暴れまわっている顔が怖い少年”に見つかる。その後、あっさり捕獲される。

S11 トキワの森? いいえ、大迷宮です。(後書き)

狩「……作者よ」

何だ?

狩「後ろを見てみる」

ん?

「うみゅ〜」

「……………(怒) x 2 2」

こ、今回出る予定だった新キャラの皆さんお揃いですね〜(汗)

狩「我は知らんぞ」

〜その後、神技は新キャラの皆さんにフルボッコされたりされな
かったり〜

狩「またな」

「ばいきゅ〜」

〜ちなみに元”トキワの大迷宮”では〜

「し、知らない間にわしの自信作の”大迷宮”がああああああ
ああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

”からくりなんちゃら”もとい”からくり大王”の叫び声が朝
まで響き渡っていたそうな…

S 1 2 新キャラが多すぎるので錯乱)？ (前書き)

おわあ！！ 新キャラ多すぎてすんごく長くなったああ！！ 神技です！！

狩

「そのせいで文章もかなり変になっているが…まあ、読んでくれ」
本編どうぞ！！

くサブタイの件についてく

このサブタイは夜月猫先生に許可をもらったのでつけさせてもらいました！！

狩

「夜月猫先生の連載、”姫君と俺の錯乱日々”も頼むぞ」

S12 新キャラが多すぎるので錯乱(?)

くポケモンセンターEIN二ビく

「ZZZ……」

『くかー……』

少年

「むじやむじや……」

……えっと……何故に皆さんソファァで気持ち良さをそつに寝てるんでございましょうか!? by神技

「プリ?」

お前のせいか!?! by神技

「ZZZ……む!?!」

『……ん? どしたグラコロ?』

「ふあくあ……よく寝た。 そんじやもつかいおやs……ぐぐっ!?!?」

「ゲバ、”どした?”では無いだろ。 それとお前は二度寝しようとするな!?!」

コイツのせいでプリンの歌を聴いてしまい、寝てしまった狩牙だ。
む？ コイツに何をしたかって？

飛び蹴りの領域を超えた飛び蹴り、”ロケットキック”をコイツの腹にぶち込んだだけだ。

む？ コイツのせいでってどつゆつことか？

とりあえず回想を見せてくれ。

く回想く

「よし、そろそろ出発するか…」

『おつ！…！』

少年

「そこのお前！」

「何だ？」

何だ？ バトルか？

「お前、プリンの歌って聴いたことあるか？」

「……は？ いや、聴いたこと無いが……」

「そんなら一回聴いた方がいいぜ！！ プリン！歌ってくれ！」

「プリ」

「……そういえば、プリンの歌には眠ってしまう効果があったよう
な…… って待て！？」

「プー プルルプープリー プープリーシー プープル
ルプー プーリーシー」

「プリン……歌うのを……やめ……ZZZ……」

「ん？ 何か……眠く……な……って……くか……」

「ぐー……」

〜回想終了〜

……と言ついで、今に至る。

『グラコロ……コイツ、気絶してるけど大丈夫か？』

「多分大丈夫だから放っておけ」

『……わかった』

「おい！！ 放っておくとかひでーよ!？」

「ほらな」

『……うん……』

「ほらな」じゃないから!？」

どうやらコイツは回復力がかなり高いようだな……

「聞いている!？」

「いや、全く」

「ひでーよ!？」

「コイツに構っていると日が暮れそうだな…… ゲバ、行くぞ」

「おお……」

「ってかお前ポケモントレーナーか？」

「そうだが」

嫌な予感がするな……

「んじゃあ、俺と…って待て!？」

予感的中!! 即ゲバ担いでBダツシュ!!

「オイ!! 待て!! つかお前速すぎ!!」

〜ニビシティ〜

「よし、撒いたな…」

『だな…』

青年

「あー」

「何だ？」

「君、もう”ニビ博物館”には行ったかい？」

「いや、まだだが…」

「それはもったいないな…よし、僕が連れてってあげるよ!!」

「いや、それより我はジム戦したいんだが…」

「それもいいけど、先に見えるもん見てった方がいいよ!!」

「それはそうだが……」

「ほら、行くよー!……」

「……ああ……」

〜ニビ博物館〜

受付

「子供は1人50円です」

「ああ……」

チャリ

「はい、確かに50円頂きました。じゅっくりびんごぞ」

「ああ……」

「はあ……これでまたジム戦が遅れるな……」

『うおおー!! スゲー……!』

「まあ、ゲバが楽しそうなのでよしとするか。」

男性 A

「みんな、ここが”ニビ博物館”だぞ！」

団体客が来たみたいだな。

少女 A

「へえー…^{さん} 門！理沙！早く早く！！」

門

「愛！ ちよつ、待てつて！！」

理沙

「愛ちゃんちよつと待って下さい！」

愛と言う元気の良い少女は赤いポニーテールに赤い羽根帽子を被っている。愛に門と呼ばれた少女（？）は黄色のシヨートに黄色い羽根帽子を被っている。理沙と呼ばれたおとなしそうな少女は水色のロングに水色の羽根帽子を被っている。

…… 3人共羽根帽子を被っているの、”羽根帽子シスターズ”
だな。

今、”ネーミングセンス無くな？”と思った奴は誰だ？ 容赦無く斬るぞ？

少年 A

「ねえ、^{はく} 白……」

白

「何だ瑠樹？」

「僕達も入っていいのかな？」

「我はいいと思うが」

「そうかな……」

「瑠樹が入らないなら、先に行くぞ」

「あ、待って！」

瑠樹と言う引っ込み思案な少年は銀髪ボサボサ頭で、肌がかなり白い。……一言いいか？ お前は女か！？

瑠樹に白と呼ばれた口調が我に似ている少年は金髪ツンツン頭で、目付きが鋭い。

女性 A

「なかなか凄いですね……」

男性 B

「そつだなー！」

男性 C

「翠〜来〜、二人とも置いてくよ〜」

「あつ！ 焔待ちやがれー！」

「やれやれですね……」

「ふあゝ…ねむ」

翠と言う女性はオーロラのようなセミロングの髪で、左耳にクリスタルのピアスをしている。　　と言うかそのクリスタル大きいぞ？
重くないのか？

来と言う男性は金髪トゲトゲ頭で、両耳に雷をイメージさせるピアスをしている。

焰と言う眠そうな顔をした男性は紅髪で、茶色のモフモフが付いたコートを着ている。　　…暑くないのか？

女の子A

「お兄ちゃん、恥ずかしいからくつつかないでよ！」

少年B

「グルルル…俺の可愛いティアは誰にも渡さん！！」

「もゝ！大声出さないでよ！！」

「痛てっ！」

兄にティアと呼ばれた女の子は紅いショートで、紅いリストバンドをしている。

シスコンであろう兄は蒼い短髪で、ティアとお揃いなのか蒼いリストバンドをしている。

まだ来るのか？　　と言うか何故我は人間観察をしているんだ！？

……まあ、いいか。

少年C

「鳳牙^{おつが}！ やつと着いたな！！」

鳳牙

「そうですね、ホントにやつと着きましたね。でも、その大地という馬鹿が暴れなかったらもつと早く着いたでしょうね」

「テメエぶつ殺すぞ！！」

「テメーこそ早くくたばりやがりなさい」

何か喧嘩しているが…大地という少年はルビー色の髪に紅い帽子を被り、全身かはわからないがおそらく全身に刺青がしてあるだろう。

大地に喧嘩を売った鳳牙という少年はサファイア色の髪で、全身の刺青を隠しているのか青いローブを着ている。

係員

「あの2人迷惑なんですけど…」

少年D

「ええそうですね。すみません、今止めさせますから」

少年E

「まーた喧嘩かよ、空も大変だなWW」

「黙れ桜樹！！ テメーまた地中に頭埋められたいのか!？」

「くーちゃんこわっww」

「くーちゃん言っな!！」

係員

「はあ……」

空という大地と凰牙の喧嘩を止める係であろう少年はエメラルド色の髪で、大地と凰牙と同じく全身に刺青があるようだ。……あだ名は”くーちゃん”らしい。……何か危ない気がするのは我だけか？

桜樹という係員にペコペコしている空を挑発した少年は左半分が赤く、右半分が青いという奇妙な髪を持っている。

男性D

「ここが”ニビ博物館”だぜ!! 玲、七夕、暗、華!!」

玲

「……うん」

七夕

「凄い……」

暗

「……」

華

「ディー兄い、凄いでしゅね!！」

「だろ? んじゃ春樹、悪いが先行くぜ。みんな行くぞ!！」

「……うん」

「はい」

「……………」

「行くでしゅ!！」

春樹

「みんな楽しそうでしたですね、三月さん」

三月

「フフ、そうですね」

ディーという四人の子供達と先に行った男性は蒼いボサボサ頭で首にダイヤモンドのペンダントをつけている。

玲という余り喋らない少女は緑のロング。

七タという少女はクリーム色の髪で流れるようなロング。

暗という無口な少年は白髪のボサボサ頭で目付きが鋭く、黒い口―ブを羽織っている。

華という少女は黄緑のツインテールで右にグラシデアの花の髪飾りをつけている。

春樹という女性と話している男性は紅い髪を七・三分けにしている、両耳に真珠のピアスをしている。

三月という春樹に話しかけられた女神のような女性は金髪のセミロングで両耳に三日月のピアスをしている。おそろくみんなの母親的存在だろう。

男の子A

「わぁースツゲーー!!」

係員

「お、お客様!? 館内では棒を振り回さないで下さい!!」

「棒じゃないよ! ”貴重な骨”だよー!」

「ええ!? ”貴重な骨”!?」

「うん!!」

三月

「霊様が迷惑かけてすみませんでした。ほら、行きますよ」

「はあ」

「やだー! 離せー!!」

霊という三月に抑えられた男の子はグレーのボサボサ頭で、おそろくいつも”貴重な骨”を持っているだろう。

男性A

「みんな楽しそうだな」

最初に入ってきた男性だ。名前はわからないが少し長めの黒髪でおそらくみんなの父親的存在だろう。

ディー

「おう、だけどアンシエ様がないぜ？」

いつの間に戻ってきてたのか、ディーがそう言う。

「何！？ 探さなくては！！」

男性Aはそれを聞いて慌てている。

「うみゅ〜 わたしはここだよ〜！」

すると、私の左側から謎の声が聞こえてきた…って何！？

ふと左を見ると…アンシエらしき少女が笑顔で男性Aに手を振っていた。

「……………」

……………はつきり言って気づかなかった…

「げ、ゲバ、そろそろ行くぞ」

とりあえずその場から離れてゲバを呼ぶ。

『ギヤアアアア！！ グラコ口早く助けに来てくれえええ！！！！』

すると、何故かゲバの悲鳴が…

「ゲバ！？ 何があつたんだ！？」

全速力でゲバの元に走っていく。

「アハハ！！」

ガス！ゴス！

『痛てえ、痛てえつて（泣）』

……すると、霊に”貴重な骨”で笑いながら殴られているゲバがいた。と言うかそれホントに”貴重な骨”なのか！？ ホントは貴重でも何でも無いんじゃないのか！？

「アハハ！！」

『痛いって（泣）』

「はっ」

とりあえず隙を見てゲバを掴み、救出。

「アハハ！！」

……ゲバがいなくなったのに気づかず、ガン！ガン！と床を叩いている霊は放っておこう。

とりあえずポケモンセンターで回復させよう。

くポケモンセンターINニビく

「ゲバ、大丈夫か？」

『うう…』

「うみゆく これは重傷だねく 早く回復させなきゃく」

「ああ、そうだな…って何故お前がここにいる！？ と言うか他の人たちはどうしたんだ!？」

「わたしはそのゼニガメが心配だったからだよく そしてみんなは帰ったよく」

「……いや、お前は帰らなくて大丈夫なのか？」

「多分大丈夫だよく」

多分つてオイ!!

「それとくわたししばらくあなたと旅する事にしたからく」

……何？

「すまんがもう一度言ってくれないか？」

「だから、あなたと旅する事にしたから」

「何故なんだ!？」

「うみゆ〜 気まぐれってやつかな〜」

「気まぐれか!？」

「そうだよ〜 それとあなたの名前教えて〜? ちなみにわたしはアンシエだよ〜」

「……狩牙だ」

「よろしくねグラコロ〜」

「ああ、よろしくな…って何で私のあだ名がグラコロだって知ってるんだ!？」

「コイツには名字を教えた覚えは全く無いんだが…」

「うみゆ〜」

「はあ…」

こうしてグラコロは新たな仲間、”アンシエ”と（強制的に）旅する事になったのであった…

S12 新キャラが多すぎるので錯乱(?) (後書き)

ども、神技です!!

狩「狩牙だ」

今回出てきた新キャラ達…本当は23人の予定でしたが、急遽+1人しちゃいました!!

狩「これからもちよくちよく出てくるらしいぞ」

まあ、”羽根帽子シスターズ”とディー&春樹は書きやすいので、出して行きたいです!!

狩「と言つかいつになったらジム戦できるんだ?」

それは俺次第ww

狩「はあ…」

では!!

狩「またな…」

S 1 3 初めてのジム戦 VS タケシ（前書き）

ども、タケシのキャラを考えてたら遅れました（汗） 神技です！！

狩「狩牙だ」

ア「うみゆ〜 アンシエだよ〜」

何か文章オカシイですが、どうぞ！！

狩「おい、せつかく出てきたのに台詞は無しか！？」

すまんが無しだな。

ア「うみゆ〜」

狩「そうか…」

えっと…とりあえずソレをしまつて欲しいんですが…（汗）

狩「問答無用！！”ぶつた斬る”！！」

ちよつと待つてkギヤアアアアアアアアアアア…

ア「悪は必ず滅びるんだよ〜」

狩「今日はこの辺にしてやるうか」

ア「作者の原形が見当たらないんだけど〜？」

狩「気にするな」

S 13 初めてのジム戦 VS タケシ

「ニビシティ」

「よし、着いたな」

『やっとジム戦だぜ…』

「そうだね」

やっとニビジムに着いた狩牙だ。

初めてのジム戦だから緊張するな…

「早くいこ」

……コイツには緊張と言つて文字は無いのか？

まあ、いいか。

どんな奴が出てこようと全力で叩き潰すだけだからな。

「ニビジム」

「ニビジム、ジムリーダー タケシ！！ お前にジム戦を申し込む！」

『来い!』』

「頑張つてね」

タケシ

「あ、今忙しいからちょっと待っていてくれ。すぐ行くから」

女A

「ええー行つちや嫌よ」

女B

「うふふ」

女C

「もうちょっと遊ぼうよ」

女D

「もっとイイコトしようよ」

女E

「遊ぼうよ」

女F

「行かせてあげないんだから!」

女G「い、行きたかったら行けば! ……その代わりいつもよりた
くさん遊んでね!」

女H

「……遊んで//」

女工

「タケシ様」

「オイオイ、お前ら大事なジム戦なんだから早く行かせてくれよ…
(汗)」

「……何だこれは……」

『……はあ!?!』

「うみゆ〜 ハーレムだね〜」

……開いた口が塞がらないとはこういうことが……

と言うか、アニメのタケシはこんなのでは無い筈だが……

「さあ、始めようか。 出てこいイワーク!」

『来い、小僧!』

「あ、ああ…… その前に一つ、お前の好きな五文字の言葉は何だ?」
アニメなら”おねいさん”と答える筈だ

「ん? そんなの決まってるじゃないか!」

「やっぱり”おねいさん”なのか?」

「いわなだれ”だな」

「イワークの”岩雪崩”！」

「そうか…って何！？ ゲバ、避k」

『ぐああー！！』

ゲバはまともに受けてしまったので大ダメージを受けた！

『テメエ！！卑怯だぞー！！』

『俺は主人の命令を受けたから行動しただけだ。 卑怯ではない』

『……チツ』

「ゲバ、悪い…油断した」

『気をつける…』

「そつだな」

『小僧、バトルに油断は禁物だぞ？』

「それはそつだが…」

『うるせえ！！ 行くぞグラコロ！！』

「ああ、そつだな」

審判

「ルールは1対1のシングルバトルです。では、始め！」

女達

「タケシ様頑張ってね〜」

『行くぜ！！』”ゴツゴツでかノツポ”！！』

『俺はイワークだ！！』

「ゲバ、”泡”だ」

『おう！！』

ゲバの”泡”！

「イワーク！避ける！！」

ミス！ イワークには当たらなかった！

「次はこっちから行くぞ！ イワーク！”岩落とし”だ！！」

「ゲバ、避ける」

『よつと！！』

ミス！ ゲバには当たらなかった！

「そして岩の後ろに隠れる」

「岩ごとゲバを叩き潰せ！！」

『OKだぜー!!』

それでも岩の壁はまだびくともしない!

「もっと強くしろ!」

「無駄だ。 ”ハイドロポンプ” でないとこの岩の壁は崩れん!」

『マジかよ!?!』

「ほう…だったら ”ハイドロポンプ” に近い ”水鉄砲” を撃てばいいんだな?」

『……は?』

「そんなの出来るわけないだろ」

「それはわからないぞ?」

『これって…』

「ゲバ、最大出力で ”水鉄砲” だ!」

『やっぱりかよ!?! …… ったく…! …… じゃあねえ! やってやるか!?!』

『ほう、面白い。 やれるものならやってみろ!?!』

『言われなくてもやったらあ!! ウオオオオオオオオオオ!!』
『……………!!』

ゲバの”水鉄砲”！

岩の壁は崩れそうになっている！

『はあ…はあ…も、もうダメだ…』

「まだダメではない。諦めるな！」

『そう言われてもよ… もう水が残ってねえんだよ…』

「そうか」

「もうダメだな。イワーク、”締め付ける”」

『小僧、頑張った事は誉めてやるが…』

イワークの”締め付ける”！

『もう終わりだ』

『ぐぐう』

ゲバは苦しんでいる！

「……そのまま”叩き付ける”」

「……ゲバ、負けたくなければ”水鉄砲”を撃て」

『うう…だから水がねえっ』

「撃て」

『わかったよ…やるよ！やればいいんだろ！！』 ”水鉄砲”！！』

ゲバの”水鉄砲”！

だが、ゲバの水は空なので水が出ない！

『……やっぱり出ねえよ』

「諦めるな！」

『お、おう…』

すると、ゲバの口から物凄い勢いで水が吹き出してきた！！

『うおおー！？』

「そんな馬鹿な…！！」

『何！？』

「発動したか…」

「うおおー 凄いね」

”水鉄砲”×3で、合成技”ハイドロポンプ”が発動した！

ゲバの”ハイドロポンプ”！

『ぐあああー!!』

効果は抜群だ!! イワークは勢いで吹っ飛び、左の壁に激突し、目を回して気絶した!

審判

「……い、イワーク戦闘不能! よって勝者! チャレンジャー……えつと……」

「ああ、まだ名前を言っていなかったな。 我の名は狩牙だ。」

「失礼しました。 勝者! チャレンジャー狩牙!」

『よっしゃあー!!』

「おお〜 初ジム戦初勝利おめでと〜」

「負けた… しかし”ハイドロポンプ”が発動するとは…ビックリしたよ。 もしかして君はそれを狙っていたのかい?」

「さあな」

「そうか… とにかくオレに勝った証、そして…」ポケモンリーグ”公認”グレーバッジ”を授けよう」

「ああ、感謝する」

グラコロはタケシから”グレーバッジ”をもらった!

「後は…これを君にあげよう」

グラコロはタケシから”技マシん34(我慢)”をもらった!

「ああ、感謝する」

『じゃあ次の町に行こうぜ!』

「ああ、そうだな」

「また来いよ!」

「わかった」

「うみゅ〜」

「どうした?」

「何でもないよ〜」

「……そうか」

こうしてグラコロは初ジム戦を勝利し、”グレーバッジ”を手に入れたのであった…

〜その頃〜

〜109番水道（海の家）〜

男

「大人も子供もポケモンもみんな大好きな”サイコソーダ”！
本300円だよ！！」

信司

「二本お願いします」

「毎度！！」

百合

「信司ー！！こっちこっちー！！」

「はいはい……」

ゴクゴク……

「あー美味し〜」

「はあ…… やつと廃墟（トキワの大迷宮）を抜けられたと思ったら、
今度は地方が違つとかふざけんなよ……」

「まあ、イイじゃん！ 新しいポケモンゲット出来たんだし！！」

「そりゃそつだけだよ…… どうやって帰るんだ？」

「……あ（汗）」

「はぁ……」

廃墟（トキワの大迷宮）が”からくり屋敷”に通じていたのか、
幸先悪い少年と少女はハウエン地方に迷い込んでいた…

S 13 初めてのジム戦 VS タケシ（後書き）

ちなみにゲーム（赤）では…

グラコロ 手持ち ゲバ（カメール）、ボス（ポツポ）、ライザ（ピカチュウ）

VS イシツブテ（LV12）

1ターン目

水鉄砲（効果は抜群だ！！）

終了。

続いてVS イワーク（LV14）

1ターン目

水鉄砲（効果は抜群だ！！）

終了。

楽勝でしたww

ちなみに次回はまた新キャラが出るようです。では！！

S14 レッツゴー！お月見山（まだ入ってないが）（前書き）

ども、神技です！！

「遊鬼だ！！」

あり？ グラコロとアンシエは？

「知るかww」

………（汗）では、本編どうぞ！！

「っーが早く俺m（強制終了）」

S14 レッツゴー！お月見山（まだ入ってないが）

〜ニビシティ〜

「じゃ〜そろそろ行く〜か〜」

「そうだな」

『おう！〜！』

狩牙だ。 現在、次の町”ハナダシティ”に出発しようとしている。

だが、そこに行くには”お月見山”と言う関門を越えなければならぬようだ。

さて、次はどんな奴らと出会えるのか楽しみだな…

…ト
ト
ト

「……………む？」

何だ？

「ど〜したの〜？ 早く行くよ〜」

「あ、ああ……………何でもない」

……一体何だったんだ？

『…』

……………

「……おおおおおおお……！！」

……………

『誰だ！？』

「誰？」

「……何か聞き覚えあるような、無いような……複雑だな」

……………

「やっつと見つけたぞオオオ！！ あん時の暴力野郎オオオオオオオオオ
オオ「ガツッ」「うわ！？」「ドタン！」「へブツ！！」

『……………』

「うみゅ〜」

……小石に躓つまずいて転ぶとか……馬鹿だな。

「お前は人間ではないのか？」

「さあね〜」

「気になる…」

「話してないで助けに来てくれエエエエエ！……！！」

「しょうがないな… ゲバ、”水鉄砲”だ」

『お、おう…』

ブッシュューー！！！！！！

「ちょっと待て！？ 明らかに音がオカシイだろオオオオオ…！！」

キラーン…

簡単に説明すると、ゲバ、”水鉄砲”の威力を間違える それを
まともに受けた少年はどこかにぶっ飛ぶ。かな？b y神技

『やっちまっただぜ…（汗）』

「だが、これで先に進めるだろ」

「そうだね〜」

〈5分後〉

「よし、もう大丈夫だ!!」

「テンション高いね」

「当たり前だろ？ おれは天下のシヨウ様だからな!!」

「ほう。ならばバトルもかなり強いだろうな」

「当たり前だ!! なんならやってみつか？」

「ああ。ゲバ、相手してやれ」

『おう!!』

「ボッコボコにされて泣き叫んでも知らねーぜ？ 行け! ブー(エ
レブー)!!」

〈5分後〉

「うう…:…負けましたあ…:(泣)」

『よわっ!!』

「はあ……」

「キミ、弱いね」

「う、うるせえ!! 放つとけ!!」

「そうか、ならば2人共行くぞ」

『おう……』

「そうだね」

「わー!! やっぱ寂しいから行かないでくれEEEE!!」

「はあ……」

〈5分後〉

「お! そういえば自己紹介して無かったな!! おれはシヨウ!
! よろしくな!!」

「ああ、よろしく。」

「お前は?」

「我の名は狩牙だ」

「ちなみに〜ニツクネームはグラコロだよ〜」

「オイ、勝手にバラすな！」

「ごめ〜ん。ちなみにわたしはアンシェだよ〜」

「よろしくな!!!」

〜自己紹介等が終わって〜

「よし!決めた!! おれ、お前らの仲間になるぜ!!」

「出直して来い」

「何で!?!」

「弱いからな」

「だったら、お前に勝てるようになるまで嫌でも一生憑いて行ってやる!!!」

『漢字違っぜ?』

「憑いて来るな」

「憑いて来るのは嫌だね〜」

「それでも憑いて行くぜ!」

『だから漢字違つて!』

こうして新たな仲間、”シヨウ”が憑いて来たのであった…

〜今回の成果〜

ゲバ Lv22になる

ボス Lv17になる

ライザ Lv15になる

ニトリ(ニドラン) つかいつの間に!?(Lv15になる

〜その頃〜

〜カイナシティ(カイナ市場)〜

「あー!この”エネコード”かわいい!」

「この”ルリリドール”、尻尾の玉が柔らかくて気持ちいい…」

2人「よし！買おう！！」

……何故か2人共ドールに癒されているのであった…

つーか先に進めよ！！

S14 レッツゴー！お月見山（まだ入ってないが）（後書き）

百「姫野百合です！！」

信「神話信司です！！」

2人「2人合わせて、”かみひめ神姫”です！！！！」

百「私達の出番が極端に少ないので、作者に（強引に）頼み込んで作ってもらったコーナー、”神姫通信”！！ 始めました！！」

信「このコーナーは、評価・感想欄に来た質問に答えたり、雑談したり、色々したりするコーナーです！！」

百「色々って何よ、色々って!？」

信「色々は色々だ!!」

百「……………」

信「今回は何もやる事が無いのでこれで失礼します」

百「あつ!？ 何勝手に終わらせてるの!？」

ちなみにアクセス数がいつの間にか1万超えていました!! ありがとうございます!! では!!

S 1 5 お月見山で潜入やら探検やら（前編）（前書き）

ども、神技です!!

狩「狩牙だ」

お月見山の話は何故か長くなってしまったので前編と後編に分ける
ことにしました（汗）

狩「まあ、読んでくれ」

本編どうぞ!!

S 1 5 お月見山で潜入やら探検やら（前編）

くお月見山く

「じゃあ！！ 特訓や！！ リュー！！ いてこましたれ！！」

「何故コガネ弁なんだ！？」

『やったるわ！！』

『オレもやったるぜ！！』

「お前もか！？」

「うみゆく」

……現在、お月見山にいる狩牙だ。

“ここには”月の石”があるらしいが、どこにあるんだか。

……とりあえず見つけたら貰っておこうか。

真つ黒な男A

「よし、あっちだな！」

む？

真っ黒な男B

「オメエら！ちゃんと着いて来いよ！！」

真っ黒な人々

「はっ！！」

何だ？ コイツらは？ ……何かアヤシいな…

「……とりあえずつけてみるか（ボソツ）」

くその頃

「あれ〜？ ショーに続き、グラコロまでいなくなっちゃった〜」

ちなみにシヨウはあの後ズバット（Lv8）に負けて、”場所が悪いやー！！”とか言いながらどっかに行きましたww

「まあ、いいや〜 ロックン、イシツブテに”岩砕き”〜」

『はいよ』

ロックンの”岩砕き”！

『ウグオ！？』

効果は抜群だ！！ イシツブテは倒れた。

「く苦勞〜」

『はいよ』

その時

愛

「…そうそうそれでー…アハハ！…あー！アンシエ様だー！！」

門

「…だろ？ ハハハ！…ってアンシエ様！？ 何故ここに！？」

理沙

「…ふふふ…あれ？ アンシエ様ですか？」

何故か”羽根帽子シスターズ”が来た。

「そうだよ〜 ”アサリーズ”は何でいるの〜？」

3人

「”アサリーズ”言（わ）ないで下さい！（うな（！）（ー）！！」

「あはは〜冗談だよ〜」

「そんで、アンシエ様は何でいんだよ？」

「気分だよ〜」

「気分ですか…」

「あーちゃん達は？」

「ピッピ達の”満月の舞”を見に来たんですよー！」

「へえ〜 わたしも見に行く〜」

「じゃあ、行きましょう」

「お〜」

……気楽だなーお前ら（汗）by神技

〜視点戻して〜

理科系の男（別名オタク）Z

「な、何ですかあなた達は!?!」

幹部であるう男

「我々は”泣く子も黙りそつで黙らない”でお馴染みのロケット団だー!!」

……何か違うような……

真つ黒な男A

「……えつと……」泣く子も黙る”です（汗）」

「うるさい!」

「はい!」

「はあ…」

そこに真つ黒な女が話しかけてきた。

真つ黒な女

「あれ? あなた見ない顔ね… もしかして新入り?」

ちなみに我は今、”グラコロール” No5、”コピースーツ”
でロケット団員に変装しているのでバレる事は無い… 筈だ。

「うん、そうです」

ちなみに性格や声を変える事も出来る優れものだ。

「そっかあ、実は私もなんだ。 私は要かなめよろしくね!」

「僕は刻ときざみ。よろしく!」

ちなみにこうして標的のアジトやら会社に潜入し、殺しをする事もあるぞ。

「そういえば今回の目的って何だっけ? 僕、寝坊しちゃって遅れてきたからわかんないんだ」

今回の目的を聞く。

「え？ そうだったんだ………実は私もなんだ。だからわかんないw」

「はぁ（汗）」

………たまにはごうゆう事もある（汗）

（視点を変えて）

シュウ

「フイーb」

間違えた（汗）

（今度こそ視点を変えて）

「リユー！”竜巻”や！！」

だから何故にコガネ弁！？by神技

『任しとき！！』

リユーの”竜巻”！

『ギャース!!』

野生のparasは倒れた。

「おっしゃ!! 次はイシツブテに”龍の怒り”や!!」

『やったるで!!』

まあ、頑張ってるみたいだ。

く視点変えてく

くお月見山深部く

「着いたね」

「そうですねー!」

「やっと着いたぜ……」

「つ……憑かれました……」

「漢字違っよ」

「し、失礼しました…」

「うみゆ〜」

「あれー？ 真つ黒な人間達が何かやってるよー」

「そつだね〜」

真つ黒な男

「よし！ここにいるピツピはみんな捕まえたし、ずらかるぞー！」

真つ黒な人々

「はっ！！」

「うみゆ〜 これじゃ〜”満月の舞”が見れないね〜 ど〜する〜
？」

「アイツら全員ぶつ飛ばす！！」

「私も殺^ちります」

いや、漢字いらさないから（汗）

「私もー！」

「全員一致だね〜 じゃ〜まずはあーちゃんから〜」

「はい！ ”火炎車”から”ゴツドバード”ー！」

”火炎車” + ”ゴツドバード”で合成技、
”ふれいむばとど炎神鳥の怒り”発動

！！

「な、何だアレは！？」

「ピッピ達を解放しろー！！」

「うぎゃああああ！？ 熱（あづ）————！！！！！！」

大変危険なので、絶対にマネしないで下さい。

「次はさーちゃんだよー」

「おう！！ ”雷”！即”充電”！！ そして”ゴッドバード”！
！！」

”雷”+”充電”+”ゴッドバード”で合成技、
”雷神鳥さんだーばーどの怒り
”発動！！

「今度は雷！？」

「早くピッピ達を解放しやがれ！！」

「アングヤアアアア！！！！！！ 痺れるうううう！！」

よい子のみんなは絶対にマネしないでね。

「次はりーちゃんだよー」

「フフフ……”心の眼”、”絶対零度”。 さあ！凍こごえなさい！凍こごり
なさい！凍こごてつきなさい！ 凍死してしまいなさい！！ そして……

生存者は”零”になるのよ…」

「あ…あ…（凍）」

生存者”零”。

マネしちゃダメ。絶対。

つーか理沙、キャラ変わりすぎ（汗）

「おお〜3人共凄いな〜」

「じゃあ、ピッピ達を解放するよー!」

「オレも!」

「わたしも〜」

「私もやります」

〜視点戻して〜

「化石を渡せ!」

「嫌です!!」

「渡せ!!」

「嫌です!!」

「渡せ!!」

「嫌です!!」

……さっきからこの繰り返しで退屈だ…

と言うかコイツは”強行突破”とかはしないのか？

キラン…

「……ん？」

左の奥に何かあるのか？

……とりあえず行ってみる。

「あれ？ これってもしかして…」

”月の石”発見か？

「……とりあえず拾っとこ」

グラコロは”月の石”（？）を拾った！

く視点変えてく

「もうええやろ……そろそろみんなの所に戻るぜ!!……ってアンシエ!?!」

「おおくシヨール発見く」

「アンシエ、もしかしておれを迎えに来てくれたのか!?!」

「違うよくわたしはピツピ達の”満月の舞”を見に来たんだよく」

ちなみにあの3人は先に行った模様。

「そうなん!?!」

「何か違うよく?」

「そんなん気にしたら負けだぜ!!」

「そういえばくグラコロ見なかったく?」

「ん? 知らねーぜ?」

「役に立たないねく」

「それひどくね!?!」

「まあね〜」

「……………」

「(泣)」

……………後半に続く(汗)

S15 お月見山で潜入やら探検やら（前編）（後書き）

百「百合ですー!!」

信「信司ですー!!」

2人「2人合わせて、”神姫”ですー!!」

百「さて、今回も始めました”神姫通信”ー!!」

信「今回はオレ達の出番が全く無かったので頑張りますー!!」

百「つて言っても質問等が全く無かったので何も出来ないんだよねー」

信「いや、そこを何とか頑張ろうぜ!？」

百「あ!そういえば作者がグラコ口達の人気投票をやってるらしいよー!」

信「ちなみにアドレスは”http://hp43.0zero.jp/anq/anq.php?uid=shingii&dir=897”ですー!!」

百「最近アンシエが好きな人が多いけど、私達にも入れてねー!!」

信「どうかお願いしますー!!」

百「とゆーことで”神姫通信”また次回ー!!」

信「お楽しみに!」

S 1 6 お月見山で潜入やら探検やら（中編）（前書き）

すみません、かなり遅くなりました… 神技です。

狩「まあ、部活のせいで遅くなったからしょうがないだろう」

それはそうですが…

狩「これから英検もあるしな…」

うん…

狩「だから更新がしばらくあまり出来ないらしいな」

はい…

狩「そう言うことで、作者が復活するまで待っていてくれ」

お願いします！！ では、本編どうぞ！！

狩「ちなみにお月見山編はまた次回に続くそうだ」

S 1 6 お月見山で潜入やら探検やら（中編）

くお月見山く

「早くよこせ！！」

「嫌です！！」

「よこせ！！」

「嫌です！！」

「よこせ！！」

「嫌 d (r y

狩牙だ。 現在、刻ときと言う偽名でロケット団員たんいんに成り済ましてい
る。

……と言うかホントにコイツ（幹部であろう男）は強行突破とか
そう言う事を知らないのか！？

いくら何でも長時間放置は耐え難いぞ？

……と言うかもう軽く3時間は過ぎたんだが……

いつまで続くんだ？

と言うかお前（無名のオタクZ）も言い合っているだけでなく、隙を見つけて逃げるとかやってくれ！！

（月影の踊り場（お月見山最深部））

ここは天井がポツカリ空いてて、昼は日光浴、夜は月光浴をする事ができ、満月の夜になるとたくさんピッピ達が”満月の舞”を踊りに来ると言う、作者が勝手に考えたピッピ達の秘密の場所である。

と言っても毎年、この場所を知っている一部の人々がピッピ達の”満月の舞”を見に来るからあまり秘密の場所とは言えない。

ピッピ達

『ピッピ

ピッピ

ピッピ

ピー

』

別グループのピッピ達

『ピッピ

ピッピ

ピッピ

ピー

』

ちなみに”満月の舞”とは、人間で言う成人式のようなもので、毎年50匹は参加する踊りである。

最初は盆踊りの様に大きな ^{えが} を描きながら舞うが、途中から10匹以上ずつに分かれて五輪のマークの形になる。

この形で舞うのが非常に難しく、1匹でもミスをしたらグチャグチャになってしまうので、やり直しか来年に持ち越しとなる。

「うみゆゝ やっぱり”満月の舞”は毎年見ても飽きないね」

「そうですねー！」

「そつだなー！」

「そうですね」

「スゲエ……」

遊鬼

「そつだなー！」

「……っってお前誰だよ！？」

「まあ、気にすんなww」

「そつかよ……」

ゝ視点を戻してゝ

「よこせ!」

「嫌です!」

「よこせ!」

「嫌です!」

「さっさとYOKOSE!」

「シバくぞ!! って何言わせてんすか!」

イライラするな...

「お前が勝手にノって来ただけだろ... と言っか早くよこせ!」

「嫌です!」

「よこせ!」

「嫌です!」

「よこせ!」

「嫌です!」

「よこせ!」

「2人!」

「よk【嫌d】」

2人「……………」

「お前が先に言え」

「いや、あなたが先に」

……………何かどこかで見たことあるような展開だな…

「お前」

「あなた」

「お前！」

「あなた！」

「お前！！！」

「あなた！！！」

要^{かなめ}

「じゃあ、私が」

2人「どうぞどうぞどうぞ……」

やっぱりか……と言っかそのネタ古いぞ！？

男の団員

「えっと…いつまでやってるんですか？ みんな待ちくたびれているんですが…」

2人

「テメエは黙ってる！！」

幹部であろう男&無名のオタクZの”爆裂パンチ”！！

「ペヤング！？」

息の合った攻撃を受けた男の団員は謎の叫び声をあげて、きりもみ回転しながらそのまま壁をぶち破り、どこかに消えて逝った。

2人

「っしー！！」

……息ピッタリだなお前ら…

↳アンシエ視点↳

うみゆ↳ わたし視点になるの初めてだから↳若干緊張してるアンシエだよ↳

ちなみに↳”満月の舞”はそろそろ終盤に入るから↳そろそろ視点をグラコロに戻すよ↳

「それ」

「アンシエ様？ どうしました？」

「何でもないよ」

うみゆ「それ」の部分だけ声が出てたみたいだね

じゃ〜今度こそ視点をグラコロに戻すよ

〜視点戻して〜

「嫌だ!!」

「よじって下をい…!」

「嫌だ!!」

「よじって下をい…!」

「嫌だrry」

……ホントにいつまでやっているんだか…

と言っかいつの間にか逆になっているんだが!?

「嫌d…よこせー!!」

……やっと気付いたようだな。

「よこs…嫌です!!」

2人

「……………」

む？ どうしたんだ？

2人

「……………何で僕（俺）達は言い合ってたっけ？」

団員の皆様

「だああ!?!」

……まるで忍 まの3人組みみたいなコケ方だな……

と言っかお前ら目的を忘れるな!!

「ゴウ…あんまり使えないわね（ボソツ）」

要!?! 何かキャラが違っんだが!?!

「てゆーか、もうそろそろキレてもいいかしら？ 刻はどう?」（ボ

ソツ）」

……………どうしようか……

一緒にキレようか…それとも止めておくか……

うーむ…

くアンシエ視点く

”満月の舞”が終わったからくなんとなく視点を変えたアンシエだよく

ちなみにく”羽根帽子シスターズ”とはお別れしたよく

だからくショーと一緒にグラコロを探すんだよく

「”満月の舞”初めて見たけどマジでよかったぜ！！ 来年も行きたいぜ！！」

「そうだねく」

「おう！！」

何故か黒尽くめの少年、遊鬼も一緒だったりするよく

「つーかお前一体何者だ！？」

「俺？ 俺は人間だぜ！！」

「いや、そっじゃなくてよ…」

「うみゅ〜」

いつになるかはわからないけど、グラコロ探しにレッツゴーだよ〜

（視点）「ry」

「はぁ…」

今回の私の最初の台詞がため息とか悲しすぎるんだが… 狩牙だ。

「…あんたらは…何時間…大体…」

2人

「…ごめんなさい、すみません、もうしません…」

見ての通り現在、キレた要が2人に説教をしている。

「わかった!？」

2人

「はいい!?!」

……キレた女と言うものは本当に恐ろしいな……

と言うか我はいつになったらお月見山から出られるんだ！？
リ
ユウやアヤノ（Karyuさんのキャラです）でもこんな夜遅く（
現時刻0時）までお月見山にいなかっただろ！？

「はぁ
」

……すまんがまた次回に続くみたいだな……

続く……

S16 お月見山で潜入やら探検やら（中編）（後書き）

百「百合ですー!!」

信司「信司ですー!!」

2人「2人合わせて”神姫”ですー!!」

百「さて！今回も始めました”神姫通信”ー!!」

信「今回はやっと届いた質問に答えたいと思いますー!!」

百「最初はゼニガメAさんからの質問ですー!!」

信「なにになに…”信司達の手持ちの強さは如何に？”だって」

百「それはネタバレになるからパスね」

信「ええ！？ 少しくらいは教えてあげようー!!」

百「しょうがないわね…少しだけよ？」

信「まず、オレのヒートはLv20で、リザードになりました」

百「私のフロウはLv15で、まだフシギソウにはなってないわ」

信「ちなみに、プラスルはオレでマイナンは百合がゲットしていたりする」

百「ちなみに、どつちもLv15よ!！」

信「さて、次はナエトルNさんからの質問です!！」

百「えーと……」コガネ弁なんてあるん？」だって?」

信「……多分あります」

百「何その微妙な答え!？」

信「あるかどうか無いかどうかは……アナタ次第です」

百「何かキャラがオカシイよ!？」

信「まあ、気にしないで」

百「……」

信「これで”神姫通信”を終わります」

百「って何勝手に終わらせてんの!？」

S17 お月見山で潜入やら探検やら（後編）（前書き）

ども、やっと更新出来ました!! 神技です!!

ア「うみゆ〜 アンシェだよ〜」

あり? グラコロは?

ア「知らないよ〜」

そかよ…

ア「ちなみに〜今回はオールシリアスでいく予定だったらしいよ〜」

ちよっ!?! お前ソレ言わないで!!

ア「うみゆ〜」

……はあ…

ア「それじゃ〜どぞ〜」

あっ! それ俺の台詞!!

ア「うみゆ〜」

うう… ちなみに、前半が長いです。

S 17 お月見山で潜入やら探検やら（後編）

深夜0時。

それは、一日の始まりにして終わりの時。

そして、短い間だが悪、ゴースト、闇の力を最大限引き出せる時でもある。

そのせいで、ある者は暴れまわり、ある者は発狂し、ある者は破壊の限りを尽くした。

なので、その時刻以降に外に出る事は自殺する事に値する。

だが、その中でたった一匹だけ暴れも狂いもしないポケモンがいた。

そのポケモンは昔、ある能力と不気味な姿のせいで人々やポケモン達から酷い”イジメ”を受けていた。

ある時はバケツの水を被らされ、ある時はカツアゲされ、ある時は恐喝され、ある時は暴力を奮われ、ある時はパシリに使われ、拳の果てに家に放火され、イジメに全く関係ない家族を亡くした。

そして、何もかもをなくしたそのポケモンは吹っ切れ、こう思った。

オレ以外みんな殺せば、二度とこんな目には逢わないだろうと。

何もかもをなくした翌日、そのポケモンはある洞窟を見つけた。

その洞窟の中には、たくさんの極悪そうな悪霊が住み着いていた。

その数、108人。

それを見たそのポケモンは思った。

こイツらを一つにしたらどれだけ凶悪な魂が出来るのだろうか

そう思ったそのポケモンはある技を使い、そのたくさんの凶悪な魂を眠らせた。

その翌日、そのポケモンはたくさんの凶悪な魂の一体化に成功し、そのたくさんの凶悪な魂の塊に名前を与えた。

”ミカルゲ”と

そして、そのポケモンは凶悪な魂を各地から集め、次々とミカルゲを創っていき、そのたくさんのミカルゲと共に各地を征服していった。

ミカルゲには人々の攻撃が全く効かず、ポケモンの技を喰らっても弱点が無いので中々倒れないから、恐れられていた。

そして、そのポケモンは”闇の王”と言われるようになり、恐れ

られた。

だがある日、一人の人間と”神の力”を持つポケモン達が現れ、ミカルゲ達を次々と成仏させていった。

これに驚いた”闇の王”は10匹のミカルゲ達を集め、最初に創ったミカルゲに合成させ、感情とある能力を与え、名前を”カオス”に変更した。

その日から一週間後、遂にその人間と”神の力”を持つポケモン達がある洞窟に攻めて来た。

部下は全滅し、ミカルゲ達はみんな成仏され、残るは”闇の王”とカオスのみ。

そして、粘りに粘った”闇の王”も後少しのところまで負け、最後の力を振り絞り、カオスのある石に封印した。

その後、カオスが封印された石はある地方の地下に埋められた。

そして、長い年月が経ち、その石はある青年が”地下通路”を作っている最中に見つかった。

だが、大して珍しい物でもないの、地上で石で小さな塔を作って遊んでいた子供達にあげ、小さな石の塔が完成した時、その石が闇に包まれ、カオスが封印から解き放たれた。

そして、一つの小さな爆発が起き、子供達はみんな死んだ。

それから、カオスは人々やポケモン達に怨みがある者共を集め、

”逆襲の間”を結成したらしい…

そして、カオスは今もどこかで逆襲の準備をしているらしい…

お月見山

「はあ…」

やっと要の説教（その間は自由なので、ゲバ達のレベル上げをしないと）が終わり、飯を喰おうとしている狩牙だ。

ちなみに、メニューは何故か”グラコロバーガー”と飲み物だけだ。

予算が無かったのか作者の陰謀なのか知らないが、これはキツイだろ…

要^{かなめ}

「おーいひ〜」

……要も旨そうに喰ってるし…我も喰うか。

「いただきm」

団員A

「待ちやがれえええ!!」

名も無きオタクZ

「悔しかつたら追い付いてみるよ」

……普通は逆じゃないのか？

と言うかオタク足速すぎだろ!?

そして、こっちに来るな!!

「うおっと!?!」

回避!!

グチャ

「……………」

「ん？」

「何だ？」

「むぐむぐ……ん？ どしたのみんなして

ブチッ

「ク、ククク……」

「え？」

「は？」

「ク？」

「クハハ、クハハハハ！ クハハハハハハハハハハ！ ……いいだ
ろう、そんなに死にたいのなら斬り殺してやろう！！」

笑いながら”コピースーツ”を脱ぎ捨て、愛用のコートから機神
鋸【斬刻】を機動させながら出す。

そして、その勢いに乗って名も無きオタクZを切り捨てる。

「ギャアアアアア！！」

「こ、コイツコエエエ！！」

「は！？」

「え！？」

「つーかお前誰だ！？」

団員達

「そーだそーだ！！」

「黙れ！ お前ら全員斬り殺してやるっか！！」

団員達

「ごめんなさい、すみません、申し訳ありません、I・m s o r

r y、I・m really sorry、ヒゲソーリー、ジョリ
ジョーリー、ジョーリーを探す総理大臣!!!」

「要以外全員土下座。」

「……後半が訳わからん……」

「そして要よ、何故お前だけ土下座しないんだ？」

「まあ、いいか。」

「お前ら……死ぬ覚悟は出来たか？」

「さあ、殺しの時間だ。」

「その頃」

「うみゆ」 なかなかグラコ口見つからないね」

「アイツどこにいったよ……」

「ちなみに「遊鬼はさつき」用事があるから帰る」とか言って帰って行ったよ」

「助っ人に誰か呼んでみるか？」

「別にいいよ」

「んな事、神じゃねえ限り出来っこねえから無理無理ww」

「だよな…って遊鬼！？ お前いつの間に…」

「まあなww んで、助っ人呼んでいいなら呼ぶぜ？」

「出来んのか！？」

「おう！-！」

「じゃ～お願いね」

「呼び方はとつても簡単。 ”しの！ 出番だ！-！”と叫ぶだけ」

「…呼んだ？」

「来たってかいつの間に！？」

「おお～来たね」

「しの、早速だがグラコロを探して欲しいんだけど…いけるか？」

「…はい。」

しのがどこからか”グラコロバーガー”を出し、遊鬼に差し出す。

「何故にお前がコレを持ってんのか知らねえが…コレじゃなくて人物だ」

「ちなみに、本名は”暗殺狩牙”だよ」

「ええ！？ アイツの名字、”暗殺”だったのか！？」

「そうだよ」

「そうだぜ？」

「…”暗殺”？」

「まあ、簡単に言つとこつちの世界でかなり強い家系だな」

「…そう。」

「んじゃ、頼むぜ！！」

「…”ソウルサーチャー魂読眼”」

それが発動したのかしのの瞳の色がコバルトブルーに変色する。

ちなみに、”ソウルサーチャー魂読眼”とは”敵や味方の居場所や生死が手に取るようにわかる能力”である。

「…ダメ…誰かに妨害される。」

「…だが、妨害される事もある。」

「マジかよ…」

「うみゆ〜」

「まあ、地道に捜して行くっぜ。しの、帰っていいぜ」

「…うん…またね。」

しのは帰って行った。

「さて、行くか」

「おう！ー！ー！」

「うみゆ〜」

「……それは返事なのか？」

視点戻して

オタク&団員達

「……………」

「まあ、ざっとこんなもんだろ」

と、停止させた機神鋸【斬刻】についた血を振り落としながら言う。

ゴウ

「なっ…！？ これだけの団員達が一瞬にして全滅だと！！」

「黙れ」

「ガハッ…」

驚いているゴウに”ロケットキック”を喰らわせ、気絶させる。

要

「流石”伝説の家系”ね…（ボソッ）」

「…：要よ、我はまだ名前も明かしてないのに何故”伝説の家系”だとわかるんだ？」

「そ、それは…」

そう言いながら両手を後ろに隠し、こっそりと闇のエネルギーを溜めていく。

「お前…何か隠していないか？」

要に少し詰め寄りながらそう言う。

「そ、そんな事ないわよ（もう少し…）」

「いや、絶対に何か隠しているだろ」

更に詰め寄りながら言う。

「な、何も隠してなんかいないわよ（後少し！）」

「ほづ…本当だな？」

更に更に詰め寄りながら言う。

「本当よ…（よし！）」

「そづか…」

そづ言いながら背を向ける。

「……今！」カオスバースト”！！！！」

それを見た要はすかさずグラコロの背に両手をあて、さっきまで溜めていた闇のエネルギーを爆発させた。

「なつ…！ がはあ…！！」

すっかり油断していたグラコロは物凄い爆発と共に吹っ飛び、壁に頭から激突した。

そして…消えた。

「えっ！？ 消えた！？ 何で！？ ……もしかして私の”カオスバースト”に耐えたって言うの！？ ありえない…”逆襲の闇”幹部の私の”カオスバースト”に耐えるなんてありえないわ！！」

これに驚いた要はパニックに陥ってしまい、うっかり自分の正体を明かしてしまった。

「ほう…”逆襲の闇”か…」

その時、全く無傷のグラコロが岩影から出てきた。

「えっ！？ 何で無傷！？」

これまた驚く要。

「お前は馬鹿か？ 世の中には”身代わり”と言う技があるんだぞ？」

グラコロは驚いている要に皮肉を言う。

「馬鹿って言うな！」

若干頬を膨らましながらそう言う。

「黙れ」

「うう…」

何故か涙目になる要。

「わかった、わかったから泣くな」

泣かれたら困るので要をあやそうとするグラコロ。

そうこうしていると急に要が不気味な笑顔を浮かべた。

「……む？」

何かと思い、振り向くと…

「お久しぶりです…暗殺狩牙くん」

「お、お前は…ぐあああ！！」

そこには、不気味な笑顔を浮かべた”買物大事”がいた。

そして、グラコロの頭を鷲掴みにした…

「時は遡り、要の”カオスバースト”がグラコロの身代わりに炸裂したあたり」

ドツズゴガアアアアアアアアアオオオン…

「何だよ今の爆発音は！？」

「何があった！？」

「うみゅ」 グラコロに何かあったようだね」

「とりあえず早く行くぞ!」

「おう!」

「うみゅ」

視点戻して

「ちょっと頭掴んだだけなのにもう終わりですか？」

「ぐっ……」

「弱いですね」

倒れているグラコロを踏みつけながらそう言う。

「がああ!」

苦しみながらもゲバが入っているモンスターボールに手を掛ける。

「頼むぞ…ゲバ」

「させません」

ゲバを出そうとしたグラコロを思いっきり蹴り上げ、殴り付ける。

「はっ！」

そして、持っていたナイフをグラコロの心臓目掛け、投げつける。

だが、ナイフはグラコロの心臓に刺さる寸前に止まり、落ちた。

「なっ!?!」

「うそ!?!」

二人はグラコロが死んだと確信していたのでかなり驚いている。

「おお〜 危機一髪だったね〜」

「マジで危なかったぜ……」

「流石アンシエだな……」

どうやらナイフはアンシエによって止められたようだ。

ちなみに、グラコロは気絶しているようで、ピクリとも動かない。

「チツ…邪魔が入りましたか… 要、退きますよ」

「はい」

「そうはさせつかよ!! 双獅魔蹴!!」

二人に光速の二度蹴りが襲い掛かる。

「 ”ダークオーラ” 」

買物大事が闇のオーラを張る。

「 なっ…！ 」

遊鬼の双獅魔蹴はそのオーラに弾き返された。

「 では、またお会いしましょう。 ” テレポート ” 」

そして、二人はどこかに消えていった。

「 チツ…逃げられたか… 」

「 くっ… 」

「 残念だね 」

アンシエよ、お前は本当に残念がつているのか？

〜 4 番道路 〜

「 うみゅ〜 やっと出れたね 」

「 ああ… 」

「そだな」

グラコロは気絶しているので、遊鬼が肩に担いでいる。

ちなみに、現時刻は4時40分。

「んじゃ、とりあえずハナダシティに急ごうぜ!」

「おう!」

「うみゅみゅ」

S17 お月見山で潜入やら探検やら（後編）（後書き）

今回は二人の都合で”神姫通信”はお休みです。

～今回の成果～

ゲバ Lv24になる。

ボス Lv19になり、ピジョンに進化する。

ライザ Lv19になる。

ニトリ Lv20になり、ニドリーノに進化する。

～お詫び～

初めてのシリアスですから、シリアスに走り過ぎてしまって、ポケモン出すの忘れてました…すみません！！m（>）m

しかも…どう直そうかすらわかりません（泣）

S 1 8 拉致られました(異世界に)(前書き)

長らくお待ちせしましたあ!! マジですみません!!

S 18 拉致られました(異世界に)

くあらすじく

何故かは知らんが”ヤツら”にいきなり異世界に拉致^らられてポケモンにされて道具やら能力やら力やらを盗られてしまったグラコロ達。

果たして”ヤツら”のアジトを見つけ出し、道具や能力や力を取り返せるのか？

……そして、元の世界に帰れるのか？

詳しくはプラネットさんの”ポケダン く空の探険隊く” 29話を読んで下さい。

「あらすじ最後テキストかよ!?!」

ツッコミ3人組(シンジ、ショウ、シン)のツッコミがハモった。

く海辺の外れく

「いくら”ヤツらのアジトを見つける” たって情報ゼロじゃ無理だろ……」

シンジと言う名のアブソルがうなだれて言う。

「シンジ、初っぱなから無理とか言うなよ……」

その横を歩くミニリュウ、もといシヨウウが言う。

「そうよ！そんなの気合いで探せばいいのよ!!」

緊張が解けたのが、本来のキャラを取り戻した のルカリオ、ユリが言う。

「シンジよ、”ヤツらのアジトを見つけ出してやる”と言ったのはお前だろ？」

微妙な口調のハッサム、カリガが言う。

「そ、そりゃそうだけどよ……」

「お前ら、言い争うのは後にして前見てみる」

ただ者ではないと思われるソーナンス、シンが言う。

「前…？ つ！？」

4匹が前を見ると、今にも襲い掛かって来そうな敵さんがたーくさんいるではありませんか。

つーかいつの間に洞窟に入ったんだ？

「おお〜 たくさんいるね〜」

間延び口調のピカチュウ、アンが言う。

「ざっと50はいるな…」

「そんなの一匹殴り飛ばせばすぐ終わる!」

ユリはそう言いながら敵陣に突っ込んで行った。

「一撃入魂!」 気合いパンチ”!!」

一番前にいたサニーゴに一撃。

……たったそれだけで50の敵がぶっ飛んでいった。

しかも、一匹残らず目を回している。

「ざっとこんなもんね!」

「……………」

「…………やるな」

「なかなかやるね〜」

カリガとアン以外全員啞然としている。

「何ポーっとしてんの!?! 先行くわよ!?!」

「あ、待ってくれ！」

しかし、その一言で我に返ったようだ。

……一言。 ユリ、弱体化してますよね！？

S 19 ピンチ！！（主に役立たず2人が）

（海辺の外れの洞窟（深部））

……どうも、シンジです。

現在、オレ達はピンチです。

なぜならさっきまで戦っていたアノプス達が（普通はあり得ないが）一斉に進化してアーマルドになり、そいつらに囲まれたからです。

しかも、ユリは戦い過ぎてボロボロ、シンは背後からの不意討ちにより気絶、グラコロはシンの応急処置、アンは行方不明。

……つまり、今まともに戦えるのはオレとシヨウのみ。

しかし、オレはもの凄く運が悪いし、シヨウは極端にバトルが弱い。

……死亡フラグ建ったな……

「……とりあえず、一匹は倒したい」

「……出来たらな」

シヨウが言い返す。

「……………」

「……………」

しほらく無言になり……

「……………どうするよコレ！？」

見事にハモった。

くその頃く

「……………」

うみゆく 何か知らない間に迷っちゃったみたいだねく

「とりあえずく探険だよく」

しほらく歩くと…

キラん

奥の方で何かが光った。

「うみゆく アレなんだろく？」

奥の方に光る何か発見だよ

「奥」

とゆ〜こと奥に来たよ

「おお〜まさかの”石碑”だね」

所々欠けてるけど〜解読するために台座から抜くよ

「そいや」

気合いが入ってるんだか入ってないんだか解らない掛け声と共に
”すぽ”と台座から石碑が抜けた。

「おお〜意外と簡単に抜けたね」

ガシャン!!

「おお〜これは”古代ポケ語”だね〜 少し読みにくいけど〜解
読するよ」

さっきの音は無視!?

「つか”古代ポケ語”って何!?

「え〜と〜 ”古来より神と崇められし大樹に感謝の気持ちの塊を
捧げ、その大樹が感謝の気持ちでいっぱいになる時、その大樹は黄

金の果実を実らせる。”」

ドラ エー!? しかも最新作の!?

「その果実を伝説の七厨具で調理し、食した者は不老不死となるであろう。」」

一部の人しかわからない懐かしのネタがドラ エと交ざった!?

「それはどうでもよくて、この石碑は作者の気分で創られたニセモノだ!! 残念でした” ……………」

何なんだよこの石碑!? 作者出てこいや!!

……………つてかアン様? 目が笑ってませんよ?

「……………」

バキッ!!

握力だけで石碑割った!?

……………「エエ…」

「さて〜 戻ろ〜」

怒りが修まったのか、そう言いながら背後を見る。

「おお〜 いつの間にか閉じ込められてるよ〜」

すると…巨大な鋼鉄の壁があった。

「っかやっ」と気付いたんかい!…とツッコミたいが、そこをなんとか我慢する。

さっきの石碑みたいになりたくないし…

「蟻一匹すら通れそうもないね」

鋼鉄の壁ですから。

「わたしには関係ないけどね」 ”テレポート”

…しかし、何も起こらない。

「あれ」?

ピカチュウは”テレポート”なんて使えません

「あゝ 忘れてた」

…忘れてたんかい。

「だったら」 ”雷”

ピシヤアアアン!!

自らに雷を落した!?

「さらに」 ”充電”

雷が落ちる瞬間に”充電”が発動する。

「そして」 ”アイアンテール”」

尻尾に白銀の光を纏まとわせる。

「アヤノちゃんごめんね」 技借りるよ」

そう言いながら鋼鉄の壁に向かって走る。

「雷いかずちを纏まといし鋼この刃いば”鋼雷斬ことうらいせん”！！」

ズバン！！

巨大な鋼鉄の壁を左斜め上から一閃。

ガラガラガラ…

それだけで巨大な鋼鉄の壁は斬り崩された。

「っーか技名全然違う！？」

「今度こそ戻るよ」

砕いた石碑を踏みつけ、ポケモン達と何故かいたアーマルド達に八つ当たりをしながら洞窟の外に出ていった。

……カリユさん、アヤノちゃんすみませんでした。

S 2 0 ……スラム？

（海辺の洞窟深部）

「た、助かった…」

どうも、シヨウです。

何故助かったか？

アンがどつかで何かやらかしたのか、ガシャン！やらピシヤアアアン！！やらズバン！！やらガラガラガラ…という大きな音を立ててくれたんだ！！

そのおかげでおれ達を囲んでいたアーマルド達（と周りのポケモン達）がどっか行ってくれた！！

しかも、いきなりの大きな音にびっくりしたのか落とし物をたくさん落として行ってくれたんだぜ！！

……中にはスイムみたいなヤツもあるけど。

「何だこりゃ？」

おれが言っ。

「スラムじゃね？」

シンジがそう言い返す。

「いや、それはねえだろ… とりあえず、喰ってみるか？」

おれが言う。

「……そうするか」

シンジが言う。

「……いただきます」

意を決して一口！

「こ、この歯を押し返すような噛みごたえ、クニユクニユとした食感！……」

「そして、噛めば噛む程、味が口いっぱいに広がっていくコレはああああ……」

「……グミだな」

「……ああ」

「……これからべつべつするぞ」

シンジが言う。

「……とりあえず、グラコ口を待とうぜ」

「そうだな……」

くその頃

「……あいつらは何やっているんだ？」

「……知らねえよ」

影からこっそり馬鹿2人を見ていた。

くその頃ユリは

「うう……」

「おお、やっと気がついたね」

洞窟の外でアンに看病されていた。

「落ちてた物だけどうよかったら食べる？」

「あ、ありがと……！？」

ここからはユリの勘違いから起きた脳内コマンドです。

スライ が現れた！

ユリ

たたかう

とくぎ

たべる

さくせん

にげる

食べるって何よ！？ ……とりあえず、特技！！

とくぎ

フレアナックル
炎のパンチ × 0

アイスナックル
冷凍パンチ × 0

エレキナックル
雷パンチ × 0

気合いパンチ × 0
ドレインパンチ

吸命拳 × 0

インファイト × 0

メガトンパンチ × 0

メガトンキック × 0

波動弾 × 0

壊滅破滅波動弾・放射型 × 5

ERROR 体力が持ちません。

エラー！？ しかも”体力が持ちません”って何よ！？

だったら戻って…

こっげき

とくぎ

たべる

さくせん

にげる

ライムに攻撃!!

ERROR 体力がありません。

またエラー!?

……こっなったら…

こっげき

とくぎ

たべる

さくせん

にげる

もっごうにでもなれ!!

「……ん?」

クニユクニユ

「コレ…ただのグミ!?!」

「そうだよ〜 美味しかった〜？」

「まあまあね…。」

「それじゃ〜わたしも〜」

あんたまだ喰ってないんかい！〜とツッコミたいけど我慢する。

「んん〜 おいし〜」

しあわせそうな顔で食べてるしね。

一通り食べた後、私達はグラコ口達を待つことにした。

S 2 1 アジト発覚！！ ……遅すぎね？（前書き）

じぶら
…

S21 アジト発覚!! ……遅すぎね?

〈海辺の外れの洞窟〉

シンジです。

一向にグラコロとシンが来ないので、外に出ることにしました。

途中、ユリが殺^やったのか、ア^ンって奴が殺^やったのかは知らないけど(多分、ユリだと思う)…

……血塗れになったポケモン達が天井まで届くんじゃないかと思うほど山になっていたり、頭から地に埋まっていたり、放置されているのを見ました。

いや、”見てしまいました。”が正しいか?

そんなんはどうでもいい。

何なんだよこの惨劇は!?

滅茶苦茶コエエよ!!

シヨウなんか涙目でオレの後ろ足に巻き付いてるし…

……正直、歩きづらい。

「シヨウ、巻き付くなら身体が首にしてくれねーか？ 後ろ足に巻き付かれっと歩きづらい」

「そ、そんな事言つてば、ぼくを置いててくつもりでしょ！？
そ、そ、そんなの絶対に引つかかかってあげ、あげないからからねー！」

……ダメだこりゃ。

恐怖でシヨウの頭が変になつてる…

「はあ……」

しょうがねー、歩きづらいけど我慢するか…

（10分後）

「はあ……はあ……」

「な、なんとか倒したぜ……」

……サニゴ雑魚1匹に対して2人掛かりつて…

しかも、2人掛かりでギリギリとか…

オレ達、いくら何でも弱すぎだろー！

にしても奇襲攻撃が”冷凍ビーム”とかマジ危なかった…

オレが気付かなかつたら、シヨウは今頃マヌケ面した”氷のオブジェ”になってただろな…

……それはそれで見てみたい。

「シンジ！ 見ろ、出口だ！！」

お、何か戯言たわごとを言っている間に出口が見えたみたいだ。

こっで一言。

「やっとかよ…」

〜タト〜

外に出ると、そこには…

「おお〜 やつと来たね〜」

「遅い！！」

「遅い」

「よお、遅かったな」

……グラココ達が出た。

その時！

「おう、やっと来たか。お前らがあまりにも役に立たなかったの
で、俺が代わりに調べといた。ヤツらのアジトは”トゲトゲ山”
って所の頂上にあるみたいだぜ？」

木の影（？）から遊鬼が出てきたってか、いつの間に!？

「いや、嘘だろ？　つか、お前、どっから出てきてんだよ!？」

シンのツッコミ!

「いや、普通に木の裂け目から出てきただけなんだけど…」

「全然普通じゃねえ!！」

再びツッコミシンジとツヨウヘン3人組がハモった。

「気ニシナイ」

「パクんな!！」

またまたツッコミシンジとツヨウヘン3人組がハモった。

「んじゃ、そゆことだ」

「逃がすかああああ!！」

ツッコミまじいねてい3人組が一斉に遊鬼に襲いかかる!

「捕まるかよ!!!」

〜結果〜

「じゃな!!!」

「.....」

.....逃げられました。

S21 アジト発覚!! ……遅すぎね?(後書き)

Pさん、後はよろしくお願いします…。(ネタ切れ)

「早すぎだろwww」

……るせえ(泣)

第貳章 いきなり新章スタートすか！？ SIDE???.? (前書き)

ホントに永らくお待ち致しました!!

これポケ!?再開です!!

……ネタが尽きるまで。

第三章 いきなり新章スタートすか!? SIDE???

2XXX年

この世はある組織によって破滅され、力が支配する世界と化していた。

ある者は暴走し、ある者は発狂し、ある者は恐喝に遇い、ある者は自害し、ある者は争いを呼び、ある者共は強奪を繰り返し、ある者は自我を失い、ある者は破壊の限りを尽くした。そんな、荒れに荒れたこの世界に……

……
失踪していた少年達が帰って来た

”元”ハナダシティ、”現”ハラダシティ（腹立たしい）

「……………」

”ヴウン”という音と共に、気を失っている少年が現れた。

「おかーさん、あれなにー？」

「シッ！ 見ちゃいけません！」

ヤの付く職業のお兄さんが地べたに寝ていると少女のおかーさん

に思われたのか、少年はそのまま放置されてしまった。
……確かに悪人面してるしな……

第三章 いきなり新章スタートすか!? SIDE???(後書き)

世界がこんな事になっちゃってる理由

ヒュ~~~~~

「ん？ 何だ？」

……人？

しかも複数！？

「ちよっ！？ 待て！！」

慌てて立ち上がったその時！！

ピッ

「……あゝ」

ミスって何かのボタンを押してしまった。

ヴォンヴォンヴォン…

そして、未来のポケモンの世界に繋がった謎の巨大な穴が少年達の真下に現れた。

「ちよっ！？ 止まれって！！」

コントロールパネルを色々操作するが、穴は消えない。

そして、少年達は穴の中へと消えて行ってしまった…
それと同時に、穴も消える。

「……どうも」

…… 1人、途方に暮れている少年を残して

第3章 いきなり新章スタートすか！？ SIDE百合 (前書き)

更新しないと言いながらも更新してしまいましたぜ！！

テスト終了まで、後少し！！

第三章 いきなり新章スタートすか!? SIDE百合

”元”????、”現”????のある廃墟

「うー」

カシヤカシヤ…

「無駄無駄ア！ ソイツはグラードンが全力で踏み潰しても壊れねえ手錠だからな！」

「この手錠はスツツツゴイんだぞツス！ 何てったってアニキが発明した手錠だからなツス！！」

「おいおい、照れるじゃねえか／＼」

「オマエナンカニコワセルモンカー」

…… 一体何なのよこの状況…

やっと帰って来たと思ったら今度は変な穴に落ちて気を失って…

またやっと意識が戻って視界も良くなったと思ったら、今度は目の前にいる変にボロボロな商人のような衣装を着ている謎の3人組に縄や鎖で身体中をぐるぐる巻きにされ口にはガムテープ、更にこの厄介な手錠のせいで完全に身動きが出来ない…

一体全体何なのよこの状況おおおおおおお！！！！

あ、ちなみに台詞の順番は上から私、アニキという奴、ツス！が口癖の奴、何故か棒読みの奴よ！！

…… ってか、こんな解説なんかしてる場合じゃない！！
抜け出さなきゃ！！まずは手錠よ！！

第貳章 いきなり新章スタートすか!？ SIDE百合 (後書き)

次回は…誰にしよっかな…？

第貳章 いきなり新章スタートすか!? SIDE信司 (前書き)

あゝ ああああああああああああああああああ!!!!!!!

更新大幅に遅れて誠に申し訳ありませんでしたあああああああああああああああああああ
ああ
あああああ!!!!!!!

第三章 いきなり新章スタートすか！？ SIDE信司

「……………」

よお、久しぶりに会えたな。
初期準主役だった信司だ。

え？

もう忘れたって？

それ酷いよ？

んで、オレがどこにいるか？

そうだな…

とりあえずオレは今、水に浮いているって事だけ教えとく。

プカー…

「……………」

ヒント2、オレの幸先の悪さはハンパじゃないぜ？

プカー…

「……………」

そろそろわかったか？

……………まだわからない方にはスペシャル(?) ヒントを。

チャプ…

右手をあげる。

「……………」

チャポン…

右手を下げる。

「……………」

もうわかったよな？

答えは…海だ！！

……………くだらなくてごめんな。

さて、そろそろ突っ込もうか。

「……………何で島が1つもねーんだよ！？」

普通はどんなに遠くても、泳いでれば小島くらい見つかるだろ！！

「はぁ…突っ込んででも無駄に体力消費するだけだし、泳ぐか…」

そう言って、どこかに向かって泳ぎ出した。

第貳章 いきなり新章スタートすか！？ SIDE信司 (後書き)

泳いで約5時間後…

信「……も、もう……む……r……」

結局島は1つも見つからず、力尽きた。

第貳章 いきなり新章すた〜とだよ SIDEマンシエ (前書き)

お久しぶりです、神技です!!

ア「やっとしよ〜の話が書けたみたいだね〜」

うぐう…

そうなんです(汗)

ア「それじゃ〜」

どぞ!!

ってか、勝手にサブタイク(強制終了)

ア「うみゅ〜」

第貳章 いきなり新章すたくとだよ SIDE アンシエ

謎の場所

「うみゆ〜 こごごご〜?」

百合が暴れて変な3人組を肉塊に変えていたり、信司が命懸けで泳いでいたりするその頃、また別の真つ暗な所で謎多き桃色姫がふわふわと上空を歩いていた。

「歩いても歩いても〜真つ暗だからキリがないね〜」

そう言って立ち止まる。

だが、足は地に着いていない。

「暗い所にいる時〜つまらない時〜はたまためんどくさくて逃げ出したい時〜そ〜ゆ〜ときは〜」

通販番組の人のような口調でそう言い、人差し指でスパッと空間を薙ぐ。

……つて、アンシエ様!?

「く〜かんいど〜お」

……最後の”お”、いらなくね?

「気ニシ ーイだよ〜」

作者が神と崇める御方のギャグ（？）をパクるな！！

「うみゆ〜」

それは返事なのか！？

………ってか、結局どっちだよ！！

「はてさて〜この切れ目の向こうには〜どんな世界があるのでしょ〜？」

スルーされた！？

「れっつらご〜だよ〜」

古っ！！

「と〜」

そして、気合いの入っていない微妙な掛け声と共に空間へと消えていった。

第三章 いきなり新章すた〜とだよ SIDEアンシエ (後書き)

ア「とゆ〜こと〜わたしレンタル開始だよ〜」

何が”とゆ〜こと〜”だアアア!!

勝手に世界抜け出すなよ!!

ア「いくら攻撃されても〜絶対に消えない分身もたくさん創ったから〜じゃんじゃん使ってね〜」

うおい!?!?

俺は無視かい!!

ア「レンタルする時は〜感想欄かミニメで知らせてね〜」

……できれば感想でお願いします。

ア「あと〜1話だけでもいいけど〜長期間レンタルできるからね〜」

長期間で…

ア「さらに〜”これポケ!?”にわたしが戻ってくるまで〜何回でも借りられて〜1回最大10体まで借りられるよ〜」

何回でもって…なあにそれえ

ア「それじゃ〜ばいきゅ〜」

……では(汗)

第3章 いきなり新章s…ザ…ザザザ…ザー… (前書き)

…ザッ…ザザザ…ザーザー…ザザザザザザザ…ザザー…
ー…ザザザ…ガガッ…ガガガガガガ…ギーギー…ガーガー
…ガガガ…ギユガッ…ギャガガ…ギャグ…ギユギギ…
ユイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ…ブツツ…ブツ
ン…

……こうなったら……

「は、ハイキングは楽し」

「イタイお兄さん、ここただの公園だよ？」

「はづっ！！」

こ、この私が”イタイお兄さん”と言われたああああ！！

じいーーーーー……

「う、うううう……」

た、頼むからもう見ないで遊んでてくれえええええ！！

《シヨウさんが公園から退場しました》

第貳章 いきなり新章s…ザ…ザザザ…ザー… (後書き)

……あの前書きは何だったんだ？

狩「……知らん」

はぁ…

とにもかくにもアンシエレンタル企画やってますんで、借りてやって下さいお願いします。

では、また次回！！

第貳章 いきなり新キャラ登場すか！？ SIDE 狩牙 (前書き)

テストでかなり遅くなりました！！
すみません！！

第3章 いきなり新キャラ登場すか！？ SIDE 狩牙

しばらくはナレ視点でお送りします。

ハラダタシテイ

アンシエが勝手に企画を始めて2時間たった頃、グラコロは…

「……………」

……未だに気絶していた。

「ちよーつと待ったあー!!」

作者がもうキリが無いと判断し、無理矢理終わらせようとしていたら…グラコロのいる遙か向こうから声が聞こえてきた。

「勝手に終わらせるなあー！！！！」

……………ってか、お前誰？

「あたしは通りすがりの美少女よ!！」

へえ〜

「へえ〜”って何よ!?!”」

「ってか普通、自分で”美少女”って言うか？」

「うるさいわね!!! かわいいんだから別にいいじゃない!!!」

……自意識過剰だな(ボソツ)

「何か言った?」

いや、何も。

「それじゃ、あたしそろそろ仕事しなきゃ」

おう、気を付けるよー

「何で棒読みなの!?!」

さあな。

「ちとど…」

自称”美少女”の少女Aが未だに気絶している悪人面の少年Kに近づき、バツと服を脱いだ。

……”脱いだ”!?!

ちよつ、何やるうとしてんの!?

……と思ったが、私の早とちりでした。

なんと、少女Aは中に”ヒーロースーツ”のような衣装を着込んでいたのだ!!

ばばーん!!

「ただでさえ平和じゃないみんなの生活をさらに脅かそうとする悪党め、此処で逢ったが100年目!! この”メリープシープ”とあたしが成敗しちやるわ!!」

……”しちや”

「効果音!!」

メエ〜

「よし!!」

成敗しちやれかつこわらいかつことじる 棒読み

「……と…とにかく行くわよ、悪党め!!」

「……」

クラコロ
悪党はこんなにも騒がしいのにまだ気絶している。
……いつまで気絶してんだよ!!

「てやああああ…れ!?!」

自称”美少女ヒーロー”こと”メリープシープ”が悪党に襲いか

かろうとしたその瞬間…悪党が最初からそこにいなかったかのよう
に消えた。

「……どこ行っ…くっ…！」

「どうした？ 我を成敗するのではなかったのか？」

消えたかと思われた悪党が瞬時に”メリプシープ”の背後を捉
えた刹那、悪党が”メリプシープ”に寝技を掛けていた。

「くっ…放せ！！ この！」

「抵抗するな。 お前の体力を無駄に消費するだけだ」

「くう…」

”自意識過剰羊”が悪党に捕らえられて”贖罪羊”になり果てた。

「うるさい…！」

「誰に話し掛けている？」

「あ、いや…えっと…その…」

「……まあいい、どうせ作者かナレーターだろう」

「そう！ それぞれ…！」

くっ…

グラコロめ…後で覚えとけよ…

「……何か寒気がするが、気にせず1つだけ言わせてもらおう」
「なによ？」

「……ピカチュウ以外のかわいいポケモンは全て外道だ…！」
「ええ！？」

……グラコロのピカチュウ愛は相変わらずである。

大事なお知らせ …… ってサブタイを見ると、何か身構えちゃっつよね。

(前書

見ての通り、大事なお知らせです。

狩「ついに連載打ち切りか…」

違えよ!!

狩「では、何だと言っんだ？」

それは を読んでの楽しみ。

狩「そうか」

では、どうぞ!!

大事なお知らせ …… ってサブタイを見ると、何か身構えちゃうよね。

最近…… ってか昨日、”これポケ!? ”を読み返して思った事。

”うわぁ…… 途中何書きてえのかわかんねえし、文章マシになったの
の一章からかよ…… 超書き直してえ”

…… ってことで、”これポケ!? ”を大幅リニューアルしたいと思
います!!

ってか、します!!

なので、異世界拉致られ編及び未来(?)編はぶっ消して、ハナダ
から再開したいと思います!!

編集したら来年の1月1日…… つまり、元日に一斉投稿しますので、
それまではアレで我慢してて下さい!!

勝手なことですが、なんとかご了承下さい!!

では!!

0 プロローグ(前書き)

手直し完了!!!!
帰ってきたぜ!!!

0 プロローグ

この世界には様々な姿、属性、技を持つ不思議な生き物：通称ポケットモンスター縮めて”ポケモン”と呼ばれる生き物が住んでいる。

そして、ここはカントー地方の”マサラタウン”。

そのマサラタウンにある左側の家：通称”主人公の家”に住んでいる少年から物語は始まる…

らなくて、その反対側の家：通称”ライバルの家”から物語は始まる。

壮大な夢を抱く^{いだ}少年少女よ、目覚めの時間だ。

その夢を叶えるべく…いざ、旅立て！！

0 プロローグ(後書き)

これからも”これポケ!?”をよろしくお願いします!!
では!!

1 それぞれの始まり〜通称"ライバル"編

ライバル
本作の主人公の家

チチチチ… チュン…チュン…

む、朝か…

「そついえば、我も今日から旅立つのだったな…」

まずは荷物の確認をしようか。

バッグよし、ハンカチよし、ちり紙よし、タオルよし、その他よし。
む？

何故”その他”なのか？

そんなもの面倒くさいからに決まってるだろう。

……む？

我が誰か？

そついえば自己紹介を忘れていたな。

我の名は狩牙^{かりが}。

性別は男だ。

む？

変な名前だと？

我もそう思うが、なにか？

む？

何故、自己紹介がそれだけなのか？

……直にわかる。

「カーリー！ 飯だよー！ 早く来ないとアタシが食うぞーー！！」

ちなみに、ここは二階で、この声は我の母のだ。

それと、カーリーとは母だけが使う我のあだ名なのだが、なんとなく危ないような気がするのは何故だ？

「わかった。 今行く。 だから我の分まで食うな」

「あいよー！！」

「はあ……」

（リビング
一階）

「あつ、狩牙おはよー！！」

これは姉の葬霞そじかだ。

む？

何故、二人とも変な名前なのか？

……これも直にわかるだろう。

さて、飯を頂くとするか。

「いただきます」

「いったただつきまーす！」

「いただきますーす！」

ちなみに、上から我、姉、母だ。

…… 2人共、朝からテンションが高いな。

〈食後〉

「ごちそうさま」

「ごちそうさまー！」

「ごちそうさまー！」

わかってると思うが、再び上から我、姉、母だ。

〈五分後〉

腕時計して、コート着て、最後に荷物持って…よし、行くか。

「では、行ってくる」

「気をつけてねー！」

……姉よ、我は旅立つのであって、遠足や遊びとは違うんだぞ？
そんなに軽くて良いのか？

「かなりの長旅だけど、カーリーなら（多分）大丈夫だから頑張っ
てきな！」

……母よ、我には聞こえないように”多分”と言ったのかも知れ
ないが、残念ながら聞こえたぞ。

まあ、細かい事は気にしないでいいか。

「さて、まずは研究所に行くか…」

今日は私の旅立つ日なのだから…

2 それぞれの始まり〜通称"主人公"編〜

〜謎の場所〜

「……は？」

……

「……え??？」

……

「……マジで????」

……

「…………………一体全体どこだよここおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!??」

いや、ホントにマジで冗談抜きでここはどこですか!?

つかオレ、自分の部屋のベッドで寝てたはずなんですけど!?
なのに、何でこんなところに突っ立ってるんだよ!??

「……とりあえず落ち着いて深呼吸しよう」

スーハー…スーハー…

ヒーハー…ヒーハー…

ヒッヒーハー…ヒッヒーハー…

ヒッヒッハー…ヒッヒッハー…

ヒッヒッフー…ヒッヒッフー…

………つて、おーい！

途中から呼吸法が妊婦さんの出産時にやるアレになってるぞー！！

「………落ち着け、オレ………」

（主人公（通称）が落ち着くまでドラビアン体操でもやってみよう）

「いや、上のドラビアン体操って何だよ!？」

うるさい、黙れ。byカハク神技

「はあ!？ ……つてか、”神技”って何!？」

………黙らないと俺自作の全自動空間落とし穴、【奈落へGO!】で地獄に落とすZE?」

「………はい」

んじゃ、さっさと進めろや。

「……はい」

オイオイ、泣くなよ…

「泣いて、にゃんが…いないもん」

……んじゃ、後は頼んだ。

「……うん」

〈5分後〉

「はあ…」

やっと落ち着いた…

よし、落ち着いた所でとりあえず周りを見渡してみよう。

「……」

前見ても真っ暗、後ろ見ても真っ暗、横見ても真っ暗…

「……」

斜め前後左右見ても真っ暗 上下見ても真っ暗 オレの人生お先
真^マっ暗^クんらんるー

……開き直んなよ。by^お神技

ああ…

何故か顔面真っ白で髪は紅く、パンチパーマの紅白縹々道化師Dが謎の動きをしているのが頭に浮かんできた…

……ってトリップしてる場合じゃねえ！！

「っーか、いい加減ここがどこなのか教えやがれ！！」

その看板見ろ。byさへくしや神技

「はあ！？ 看板なんかあるわけ…」

右を見る。

「……って、あつたあああああああああああああああああ！！」

うるさい、地獄に落とすぞバカ野郎。byさへくしや神技

「……はい。っーか、”謎の場所”って何だよ！？」

四天王の最初の一人を無視して、後ろの扉に”なみのり”したら行ける所。

「ネタバレすんな！！」

みんな知ってるぜ？

「……マジで？」

マジだ。

「……もしかして知らないのオレだけか？」

「残念ながら、そのようだな」

前方の少し離れた所から狩牙が現れる。

「！？ 何でお前が出てくんだよ！？」

「む？ 我はある者にお前を殺すように頼まれたから、来ただけだ」

「は！？ オレを殺すって！？ 何で！？ どうして！？ 何故に

！？ いつ！？ どこで！？ 何を！？ どうした！？」

「……パニクリすぎだろ」

「あつたりまえだろ！？ いきなり”殺す”なんて言われたら誰だ
ってパニクるだろ！？」

「……確かにまあ、そうだが」

「だろ！？ だか」

「だが、我としてはさっさと終わらせて帰りたいので……」

チャッ……

狩牙が懐からナイフを出す。

「……殺させてもらっつ」

「コッ……コッ……コッ……」

「や、やめる……！ く、来るな……！」

「コッ……コッ……コッ……」

3 じいさんを探せ

〈狩牙視点〉

狩牙だ。

現在、研究所に向かって歩いている。

「あつ！ おつはよー！ グラコロ！ ジューズ買ってきて！」

「……朝からパシらせようとするな」

朝から我をパシらせようとしたこの人物は、幼馴染みの百合だ。

我はコイツに”グラコロ”というあだ名を付られている。

……む？

何故、百合に付けられたあだ名は”グラコロ”なのか？

……直にわかる。

それに……旨いだらう？

ツクのグラコロバーガー。

「グラコロ？ 一体誰に話かけてるの？」

「……いや、なんでもない」

……言い忘れていたが、百合は読心術が無意識に使える。

だが、本人は自覚がないので周りにいる人々が沈黙していても、百合には何かボソボソ喋っているように感じるらしい。

「ホントー？」

「本当だ」

「いついつ時は”コイツ”を使おうか」

”コイツ”とは、私の自作秘密道具【グラコロール】の事だ。ちなみに、【グラコロール】の名付け親も百合で、”No1～7”まである。

まあ、簡単に言えば私の7つ道具だな。

そして、今回使うのは…コレだな。

ゴソゴソ…

ちなみにコレとは、No3の【RS Gツクール^{アーラステージ}】だ。

【RS Gツクール】とは、道端で偶然拾った二つ折りケータイを改造したものだ。

元々ある小型カメラで撮った場所の過去（地球ができる瞬間）から現在までに何があったのかを観ることも、データ化して保存することもでき、あらすじを作るのにも便利な道具だ。

更に、元はケータイなので年数や日付、時間の入力も楽だ。

ただし、かなり改造したのでメールや通話などは一切できないぞ。

ちなみに何故、こんな物が作れたのかは…企業秘密だ。

……む？

何故、こんな名前なのかって？

……百合が名付けたからな…

さて、とりあえず”3分前”と入力してみるか…

「……ほう、なかなか面白い起き方じゃないか」

これはもう二度と見れないかもしれないからな、保存しておこうか。

「さて、信司の恥辱映像も観れたところでそろそろ行くか…」

く大城戸博士と研究仲間達のポケットモンスター研究所 カント
地方にしか無い素敵な研究所 く

……上の異様に長いやつは一体何だ？

いや、今はそれよりかじいさんを探さなくては…

……む？

あれは名も無き研究員Aか？

「すまないが、じいさんはどこにいるのだ？」

「あつ、狩牙君おはようございます。今、博士は留守ですよ」

名も無き研究員Aが言った。

「名も無き研究員A”って酷くないですか!？」

「何の事だ？」

「いや、何でも無いです…」

「……そうか」

ならば、一旦草むらにでも行くか。

……後ろから聞こえてくる。”どうせわたくしなんかただのしがな
い名も無き研究員Aですよ…”という嘆き声は無視しておこう。

4 じいさん大暴走！！（前編）

〈1番道路 グラコ口視点〉

……作者よ、〈視点〉の時くらいは”狩牙”にしてくれ。

あいよ。byたぐさ神技

〈狩牙視点〉

気を取り直して、狩牙だ。

現在、1番道路にて”コラッタ”という名の赤目紫ねずみ達と戯たわむれている。

……現状を説明しよう。

現状1

所々草むらが生温かいナニカで紅く染まっている。

現状2

私の周りにいたたくさんの赤目紫ねずみが、生温かいナニカを流しながら白目を剥いて地に伏している。

現状3

私の右手が生温かいナニカで紅く染まっている……

……”私の右手”？

「アレは何だ!?!」

子供Cが言った。

「車か!?!」

子供Dが言った。

「いや、電車だ!?!」

子供Eがボケる。

「いや、アレはジェット機よ!?!」

少女Fもボケる。

「……いや、アレはポケモンだ!?!?!」

子供Gが言った。

「おお……!?!?!?!?!」

子供CDEFが納得した。

「ふっ……」

子供Gはカッコ付けた。

「いや、みんな全然違うだろ!?!　そしてG、かっこつけんな!

「遅くなつてごめええええええん!! 孫よおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおお!!!!!!」

……じいさんがどこからかはわからないが、時速300kmで色々吹っ飛ばしながら大爆走して来たようだ。

「……来たか……」

ガシッ

「つて、うおお!?!」

「このままいつもの所に突っ走って行くぞおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおお!!!!!!!!!!!!」

「これで54回目だぞ!?!」

「だったら、今度帰って来た時にもう1回突っ走って行ったら5回目”じゃな”」

「……し、しまったああああああああああああああ
」!

「HHHHHHHHHHHHHHHHHHHH」

……相変わらず、じいさんは元気過ぎるな……

オークド
ヤツが来た…

「……またお前か… もう何十回も言うが、後ろの壁をぶっ壊すでないー！！ それと、カツラン言うなー！！」
「……えーと、ふー」

エリートトレーナーはいきなりの事で混乱している！

「えー」

「えー」じゃないだろー！！

「えー」ではないっー！！

「……あー」

「だって、足が止まんなかったんじゃもんー！！」

「いい歳して語尾に”もん”をつけるな」

「……すみ」

「……はい…」

「それでよい」

「……もう帰ってやるもん」

無視され続けたエリートトレーナーは帰ってしまった。

「……さて、オークドよ…さっさと後ろの壁を元通りにしろー！！」

だが、3人はその事に全く気付いていない！？

「やー」

「……ちなみに、じいさんに拒否権、逃避権及び基本的人権はない」
「……いや、いくら何でも”基本的人権”だけは奪ってやらないでやってくれ…」

「断固拒否する」

「……即答ってトドイぞ」

「……それで……じいさんよ、やるのか、殺られるのか……どっちがいっ」

「やりますやらせて下さい狩牙様あ」

オーキドはグラコロに泣きついてきた！

「それでいい」

〈5分後〉

「……はあ……はあ…… やつと終わった……」

じいさんがぶっ壊したグレンジムの壁は、元通りに直っていた。

「……苦勞」

「……はい……」

「それでは、研究所に戻るぞ」

「気をつけるんじゃぞ!!」

……色々あったが、とりあえずは一件落着だな。

〈戻って、大城戸博（以下略）〉

”大城戸博”まで来たのなら”土”も入れてくれ!!

「はあ……」

我が上のアレに突っ込んでいると……

「はあ……何か知らねえが、ヒドイ目にあつたぜ……」

「こらー！ グラコロー！ 私のジュース買わないでどこ行ってた
—————！！！」

……この物語で最も不幸なヤツと幼なじみの少女が来た。

「えっ！？ それヒドくね!?!」

「黙れ」

「はい……」

これでやっと、全員が研究所に揃つたようだ。

……長かったような、短かったような……

複雑だな……

6 信司の災難

くマサラタウン 信司視点く

「ううう まだ背中が痛てえ……」

よお……

今、家を出たばかりの信司だ……

「あつ！ 信司おっはよー！」

「……おはよ」

コイツは幼なじみの百合だ。

えっ？

もう知ってる？

……なら、百合が”読心術”を使えるのは？えっ？

これも知ってるのかよ……

……暗殺カニムシのヤツ……

オレにも幼なじみの紹介くらいさせてくれよ……

……つて、ええ！？

暗殺が誰か知らねえの！？

……アイツ、まだ”名字”教えてなかったのか……

えっ？

早く教えろ？

わかったよ……

教えてやるよ。

アイツ……狩牙のフルネームは”暗殺狩牙”だ！

……まあ、アイツは”一応”平和主義者だから、この名字があまり好きじゃないけどな。

……って勝手に教えてよかったのか？

……何か後でヒドイ目にあいそうな予感が…

「」名答 by 神技たぐつぎ

……って、はあ！？

マジかよ！？

マジ

……はあ

「なんかいきなり元気なくなったけど、どーしたのー？」

「……いや、何でもねえよ…」

「ふ〜ん…」

「な、何だよその、”怪しい…”的な目は

「怪しいから怪しく見てるだけよ」

そうかよ…

「そういえば、さっきグラコロに会ったよー！」

「えっ！？ 暗殺に会ったのか！？」

「うん！ ジューズ代渡して、買いに行かせたよー！！」

……朝からパシリに使ってやるなよ…

「でも、あれから見てないよー」

「え？ じゃあ、暗殺はどこ行ったんだ？」

「んー… わからないけど、多分”草むら”だと思うー！」

……多分って…

「……理由は？」

「女の勘よー！」

「……わかった、行ってみる」

「行ってらっしゃーいー！」

さて…

暗殺を探しに”草むら”に行くか…

く1番道路く

はあ…

百合が”女の勘”を働かせて、暗殺は”草むら”にいたるとか言ってたけど…

ザッザッザッザッザッ…

「アイツ、全然いねえじゃねえか…！」

アイツは現在オーキド博士といっしょに（無理やり）海の上を全力疾走中です

ザッザッザッザッザッザッザッザッザッ…

「はあ… 一通り探してもいないから、一旦町に戻って博士ん所行

ポツポAが”何だ？”と言った。

「ポポツ！？」

ポツポBは”何だか騒がしいぞ！？”と言った。

「ポ〜？」

ポツポCが”一体何があったの〜？”と聞いた。

「ポ」

ポツポDが”多分、アイツが叫んだんだと思う”と答えた。

「ポポポ…？」

口調がヤヴァイポツポEが寝起き様に”俺の安眠を邪魔した命知らずの馬鹿は何処のどいつだ…？”と言った。

「ポ、ポポ！？ ポツポクルポ！？」

ポツポA B C Dは、ポツポEを恐れながらも”ポ、ボス！？ どうかなさいましたか！？”と聞いた。

どうやら、ポツポEはポツポA B C Dのボスのようだ。

「ポツポポツ…」

ボスポツポが”俺の安眠を邪魔した命知らずの馬鹿は何処にいる…”と言った。

「ポツクル」

ポツポDが信司を羽で指(?)差しながら”アイツがその草むらで何かしら叫んでいましたよ”と言った。

「ポ… クルポツ…！」

ボスポツポはポツポA B C Dに”そうか… お前らアイツを殺つて来い！！”と命令した。

「クルツポー…！！！！」

ビシッ！

ポツポ達は”イエッサー…！！！”と言いながら敬礼した後、飛び去っていった。

バサササササ…

「クククク… ポルポクルク…」

ボスポツポは”くくくく… これで命知らずの馬鹿は終わりだな…”と何か危ない事を言っている！？

く視点を戻してく

バサササササササササ…

……ん？

「何だ？」

何か嫌な予感がする……

そう思いながらも空^{うへ}を見てみると……

「ポポツククルポ！！！！」

訳 お前が叫んだせいでボスが起きちゃったじゃないか！！！！

4匹のポツポ達がオレに怒鳴って（？）きた！？

……つか、何て言ってるんだよ……

「うるせえ！！！！ つか、ポケモンの言葉なんかわかるかよ！？」

「ポクルツ！！！！ ポポポポクツ！！！！ クルポルクツ！！！！

！！」

訳 うるさいっ！！！！ わからなかったっていい！！！！ とにか

く覚悟しやがれ！！！！

……全然わかんねえ……

……つか、お前ら人間の言葉わかんのか？^{ひんぐせ}by神技

「ポポツク！！！！」

訳 わかって悪いか！！！！

ポツポA B C Dは何もない空に向かって怒鳴った。

ああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

（30分後）

「ポツククク！！！！」

訳 お前がボスの眠りを邪魔したからこうなったんだよバー……カ！！！！！！

ポップ達は信司を罵倒しながら飛び去っていった。

バサササササササササササササササササササササ……

「……………う……………う……………」

オレ、何かしたか？

バタツ……

その後、ボロツボロのボロ雑巾になった信司は、2時間後に目が覚めるまで誰にも起こしてもらえなかったらしい……

7 パートナー選び（前編）

（オーキド博士のポケモン研究所 狩牙視点）

「はあ…何か知らねえが、ヒドイ目にあつたぜ…」

「こらー！ グラコロー！ 私のジュース買わないでどこ行ってた
ー！ー！ー！！！」

「おお！ 来たか信司、待ってたぞ…って、百合ちゃんも来たの！
？」

「…何故、百合も来たんだ…？」

狩牙だ。

現在、じいさんの研究所にいる。

原作やゲームならば、これから”ポケモン図鑑”をもらい、パート
ナーになる”ポケモン”を3匹の中から1匹選べるのだが…

「グラコロー！ 聞いてんのかー！ー！！！」

「あ、ああ…」

…どうやら、流れるにまだ無理のようだな…

「ま、まあ…そう怒鳴らないで百合ちゃんもそこにならんでならん
で」

「はい」

……と思っていたが、じいさんが流れをあつさりと変えただど！？
や、やるなじいさん…

「ゴホン！ よし、くb…ゴホゴホッ！！ ウェッホン！！ ウエッホウエッホ！！ ……ゴハッ！！！！」

べしゃっ…

博士吐血。byおんくし神技

「…って、じいさん大丈夫か！？」

我が心配してじいさんに走り寄ると、

「大丈夫ですか博士！！？」

「ちよつと！？ 博士大丈夫！！！？」

信司と百合も走り寄ってきた。

「……な、何とか大丈夫じゃ…」

「そうか…」

……安心した。

いつもはドラマとかによくある”血糊”なんだが、今回は本物の”血”だったからな…

「はあ… よかったぜ…」

「ホントよ！ ビックリしすぎて飛び出た心臓がグラコロに当たるかと思っただわ…」

……百合よ、いくらなんでもそれはないだろう。

「ゴホン！ ……気を取り直して、”ポケモン図鑑”配るぞー！！
百合からどんだん右に回して行けー！！」

「あ、あのー… 博士？オレ達3人しよ」

「問答無用じゃー！！」

「いや、s」

「黙って回せ」

「グラコロもかよ…」

……いつも思うのだが、何故我がいない時は”暗殺”で、我がいる時は”グラコロ”なんだ？

確かに、”暗殺”という姓は好いてはいないが。

「回ったかー！？」

「はい」

「ああ」

「YES、ボス！！」

信司と我が返事をし、何故か百合は敬礼をした。

「いや、何故に百合の返事はどっかの組織風なんだよ！？」

信司が百合に突っ込んだ。

「何よ？ 悪い！？」

だが、百合には信司のツッコミが効かない！？

「いや、別に悪くはないんだけどよ…」

「だったら何よ！？」

「……いや、もう何も無い」

信司が折れた。

「ならいいけど」

「……はあ」

信司と百合のコント（？）が終わったところで、準備を終えたじいさんがやって来た。

「さあ、3匹の中から好きなポケモンを選ぶのじゃー！」

「じいさん、待ってくれ」

「何じゃ？ 孫よ」

「とりあえず、選ぶ前にその3匹を我に観察させてはくれないか？ その方がより良いパートナーを見つけやすいだろうからな」

「おお、そうじゃな！ では、頼むぞー！！」

「あっ！ グラコロずるーい！！ 私にもポケモン見せるー！！」

「オレにもm」

「アンタは黙っていなさい！！」

「……何で？」

……そのうるさい奴らは放っておこうか。
さて、まずは左のポケモンからだな。

ボールを投げる。

ポンッ！

「こ……コイツはまさかー！！」

我が見たポケモンは……コイツだ。

1

2

3

『オレサマは天下のトランセル』 防御は任せろ”硬くなる”
今日も明日も”硬くなる”』 それ！ 硬く、硬く、KA

T A K U N A R U 〓〓

「……何故”トランセル”なんだ……」

……む？

そんなことより、何故コイツトランセルの喋った（？）事がわかるのか知りた
い？

それは、我に”ポケモンの言っている事がわかり、喋りかけること
ができる”という”能力”があるからだ。

ちなみに、”能力”は”暗殺”の血を継ぐ者なら誰でも持っている
ぞ。

例えば、姉は”瞬間移動”ができる能力、母は”触れたモノを粉々
に粉碎”してしまう能力、そしてじいさんは…知らないな。

『おー！ ニーチャン、オレサマといっしょに硬くなるうZE』

「……さ、さて、次は真ん中のやつだな」

『オイオイ、無視かよニーチャン。もしかして、”虫”だけに
無視”ってか？ うまいなニーチャン！！ H A H A H A ！！』

「……」

……ウザったいなコイツ…

「戻れ」

ボールを”トランセル”に向けて真ん中のボタンを押す。

『オイオイ、それh』

ピー… シュルルルル…

「次は何が入っているやら…」

ボールを投げる。

ポンツ！

「……またか…」

我が見たポケモンは…コイツだ。

1

2

3

『そ、そうだ！ 硬くなるんだ！！ もつと…もつと硬く！！ ボ
クは硬くなるんだあああああああ！！！！』

……トランセルの次はコクーンか…

「……戻れ」

『ひ、ひどいやー！！』

ボールに戻る。

ピー…… シュルルル……

「この調子で行くと……次はコイキングか？」

ボールを投げる。

ポンッ！

「……何故、コイツなんだ……？」

我が見たポケモンは……コイツだ。

1

2

3

『ワタシは誰だ？ 何故ここにいる？』

「……………」

何故、最後の最後にミュウツーが出てくるんだ！？

『オマエは誰だ？ ワタシも誰だ？』

……これは、全然ダメだな…

「我は狩牙だ。そして、お前の名は…」

少しふざけてみるか…

『ワタシの名は…？』

「……」マサキ”だ”

いくら考えても、コレしか出てこなかったので勘弁してくれ。

『ワタシの名は…”マサキ”』

「そうだ、”マサキ”だ」

『……わかった。今からワタシは”マサキ”だ！』

「ああ」

『ありがとう、狩牙…』

礼には及ば^おん。

「ミュウツーもとい”マサキ”よ…」

「戻れ」

ボールに戻す。

ピー… シュルルル…

何故かはわからないが、清々しい気分だ。

「……………」

……さて、じいさんに文句を言いに行くか…

「……じいさん」

「何じゃ？ 孫よ、終わったか？」

「ああ、終わったには終わったが…」

「終わったが…？」

「何だこの3匹は！？」 トランセルクーンコイキング 虫と虫と魚ではないか！？」

ちなみに、マサキ ミュウツウの入ったボールはそこら辺に落ちていたコイキングの入ったボールとこっそりすり替え、私のリュックに入れておいた。

……もちろん、後で逃がすからな。

序盤から強すぎるポケモンがいたらつまらないだろ？

「マジかよ！？」

「何ソレ！？ 博士ひどーい！！」

それを聞いた信司と百合がじいさんに怒鳴った。

「ま、待ってくれ！ すぐ、いつもの3匹を用意するから！！」

くカップラーメンができる時間後く

……作者よ、普通に”3分後”と言ってくれ。

「よし！ 用意出来たぞー！……！」

「ああ」

「はい…！」

「はーい…！」

さて、今度こそ選ぶか…

8 パートナー選び（後編）

くオーキド博士の研究所く

狩牙だ。

現在、パートナーを選ぼうとしている。

……ちなみに、じいさんはどこかに消えたようだ。

「誰から選ぶの？」

百合が聞いた。

「我は最後でいい」

「だったら、オレから選ぶぜ！」

我が最後でいいと言つと、信司が先に選ぶと言い出した。

「わかった！」

百合がそう言つと、信司がポケモンを選び出した。

く1分経過く

「どいつにしよっかな」

「どいつでもいいだろう」

「そうよ！ 早くしてー！」

「……2人共ヒドイよ……」

……いんせう苛々してくるな……

く5分経過く

「んー… ゼニガメもいいけどな？ フシギダネも意外とグーだよな… でも、やっぱりヒトカゲか？」

3匹共ボールから出して考えるが、なかなか決まらないようだ。
3匹共”早く選べ”というような顔で信司を見ている。

「うるさい、黙って選べ」

「それひどくない？」

「お前が黙ってさっさと選べばいいことだろう」

「早くしてよー！」

5分経ってもポケモンを選ばない信司に百合が怒鳴った。

「そ、そうだけどさ… 普通、迷うだろ？」

「いや、全く」

「全然」

2人で即答してやった。

……我は”最後に選ぶ”と言ったからな。
迷うも何も、最後の1匹を選べばいいだけだ。

「マジすか!？」

「驚いてないで早く選んでよ!!！」

「……早く選べ」

このやり取りでさらに1分経ってしまった。

「わかったよ……じゃあ……ヒトカゲ、お前に決めませ!!！」

信司がヒトカゲを抱き上げる。

「カゲー!!！」

ヒトカゲは選んでもらえて喜んでいるようだ。

「オレは信司だ! ヒトカゲ、よろしくな!!！」

「カゲツ!!！」

ヒトカゲは”よろしくね、信司!!！”と言った。

「それで、名前は何にするの？」

百合が聞いた。

「やっぱ”ヒロ”だよな!!！」

「いや、伏せ字が入った時点でダメだろう」

「カゲカゲ……」

我が突っ込むと、ヒトカゲも”その名前、どこかで聞いたことあるしね……”と突っ込んだ。

「……じゃあ、マグマ」
「ヒート”””にしてあげ」

一向に決まりそうもなかったので、勝手に決めてやった。
由来？

そんなものは無い。

「……わかった、それにしとく。 ヒトカゲ、お前の名前は”ヒート”だ!!」
「カゲー!!」

どうやら、ヒトカゲは”ヒート”という名前を気に入ったようだ。

「次、私が選ぶ!!」

信司がポケモンを選び終えた瞬間、百合がポケモンを選ぶと言った。

「好きにしる」
「わーい!!」

百合が両手を上げて大袈裟に喜ぶ。

「子どもか!?!」
「我もお前も子どもだろう!!」
「あっ… そっか」

……信司のツッコミが気に入らず、つい突っ込んでしまった。

「よし!! この子に決めた!!」

「ダネダネー!!!」
「早っ!?!」

百合が笑顔でフシギダネを抱き上げる。

……信司のツッコミはスルーさせてもらおうか。

「ほう…… フシギダネか……」

「だって、フシギダネってかわいいし」

「フッシー」

フシギダネは嬉しかったのが、「ありがとうー」と言った。

「……そうか」

……かわいいか?

口に出したら殺され兼ねないので、止めておこうか。

「そうか? そんなにかわいくないと思うけど……」

……^{バカ}信司がストレートに言ってしまった。

「信司、グラコロ……ちょっと来て?」

「何だよ?」

百合が^{バカ}信司に一呼び出し(死刑宣告)を掛ける。

……む?

何故、我も?

「百合!?! 何か顔怖いよ!?! 痛っ、痛いつて!?! 耳が千切れる!?! ってか、オレらをどこに連れてく気!?!」

「百合！？ 何故、我もなんだ！？ ……はっ！！」

百合が無意識に読心術を使えるということ忘れていた！！

「……いいから来なさい！！」

これはヤバイな……

「どうするグラコロ！？」

「……諦める」

……逃げる事ができないのなら、戦うまでだ！！

……む？

あの3匹はどうするのか？

……研究所に残ったままだろう。

くオーキド博士の研究所の裏く

「天の果てまで昇って死ぬか、地の底まで沈んで死ぬか、どっちか好きな方を選べ！！ 拒否権は無い！！」

「……いや、フシギダネがかわいいかわいくないぐらいで暴れ」

ぐいっ

百合が左手で信司の胸ぐらを掴み、持ち上げる。

「……まずはアンタからのようね」

「……え」

「はあ！！」

スゴス！！

百合が空いている右手で拳を作り、信司バカの顎を砕かんばかりにアッパーを繰り出す。

「ガフツ！！！」

百合のアッパーをまともに喰らった信司バカは、真上に天高く吹っ飛んでいった。

「せい！！！」

ガキヤア！！

信司バカを追うように天高く跳んだ百合は、吹っ飛んでいる信司バカの腹に裏拳を叩き込む。

「フグオ！？！」

追撃が来るとは思いもしなかったのか、百合の裏拳を喰らった信司バカは間抜けな声を出してさらに天高く吹っ飛び、天の果てまで飛んでいった。

すたっ

そして、百合が無傷で着地する。

「よし！ これで当分は帰って来れないわね！！！」

「……………ああ、そうだな」

……………あんなに天高くから着地して”すたっ”だと!?
無傷という事もあり得ないが、せめて”ズドオオオオオオオオオ
ン!!!!”だろう。

「それじゃ… グラコロ、アンタの番… よっ!!」

死刑宣告が終わると同時に、百合が渾身の”マツハパンチ”を繰り出す。

「甘い」

だが、我はそれを左手で受け流し、空いている右手で百合の首に手刀をお見舞いする。

「くっ…」

パタッ…

そして、百合は呆気なく気絶した。

「……………はあ」

後は、吹っ飛びに吹っ飛んで逝った信司の救出をすれば一件落着
だろう。

「行くか… つ!?!」

我が信司の救出に行こうと、空を見上げたその時…

「……さて、研究所に戻るか」

百合を背負い、信司バカを引き摺ずりながら研究所へと歩ほを進める。

く戻って、再び研究所へ

む？

百合と信司バカはどうしたか？

……面倒なので、そこら辺に寝かせておいた。

「さっさと選ぶか… とは言っても、コイツだけしかいないが」

そう言いながら、目の前にいる”ゼニガメ”を持ち上げる。

「ゼニ…」

待ち草くたひ臥れていたのか、ゼニガメが”やっとオレの番か…”と言った。

……そろそろ面倒になってきたので、ポケモン達が喋る時は始めから”『』に訳を入れて入れておこうか。

「ゼニガメよ、遅くなってすまなかったな」

『全くだぜ…』

持ち上げていたゼニガメを台に戻す。

「まずは、自己紹介をしてくれ」

『……オレが何言ったって通じねーのに、”してくれ”って何だよ

？ お前が勝手にしてるよ！』

……そうだったな。

我だけが”能力を通じてポケモン達と会話ができる”という事を忘れかけていた…

ならば、その事を教える事も兼ねて少し驚かせてやるつか。

「……そうか。 それならば、勝手にさせてもらおう」

『……早くしろよ』

「ああ。 我の名は狩牙。 暗殺狩牙だ」くしろかりが

『は？ ”グラコロカリカリ”？ 変な名前だな』

”ゼニガメ”が軽く笑いながら言う。

「初めて会った頃の百合とほぼ同じ反応だな。 ……だが、我は”グラコロカリカリ”ではなく、”くらこるかりが”だ」

『……つつても、どーせコイツには通じてn…って、待て!?!』

”ゼニガメ”が違和感を感じたのか、突っ込んだ。

「どうした？」

『どうしたもこうしたもねーよ!! お前、オレの言葉がわかるのか!?!』

「そつだが」

長くなるのは避けたいので、短くしてやった。

『”そつだが”じゃねーよ!! お前、ソレがどんだけ凄い事かわかってんのか!?!』

「ああ」

長々と説明してやりたいが、時間が無いので再び短くしてやった。

『“ああ”じゃねーよ!! ……ダメだ、この調子じゃ永久ループになっちまう』

ループになる事を悟さとったのか、“ゼニガメ”が折れた。

『……にしても驚いたぜ。まさかポケモンの言葉がわかる人間が本当にいるなんてよ』

「そうだろうな」

『……んで、お前の名前……暗殺狩牙”でよかったよな?』

「ああ、それがどうかしたか?」

『“グラコロ”って呼んでいいか?』

「……………」

……まさか、パートナーにまで“グラコロ”と呼ばれる事になるとは……

『どうしたんだ?』「……………ああ、何でもない。 ”グラコロ”と呼んでいい」

『ありがとよ!! それと、名前決めて欲しいんだけど…… いいか?』

「ああ」

『んじゃ、頼むぜ!!』

「ああ」

……とは言ったものの、簡単には思い付かないな。とりあえず、“ゼニガメ”を漢字に直してみるか……

” 銭亀 ”

”銭”は1銭2銭の”セン”でいこうか。

では、”亀”は…？

亀鶴キカクの”キ”か。

「よし、決まった。今日からお前は”センキ”だ」

『センキ”… 気に入った！！ これからよろしくな、グラコロ
！！』

「ああ、よろしくな”センキ”」

ゼニガメ、もとい”センキ”が手を差し出してきたので握手をする。

「……はっ！？ ここは…？」

「んう… ここはどこ？」

すると、狙っていたかのように気絶していた信司バカと百合の目が覚めた。

「む、起きたか。 お前らのボールだ、受け取れ」

そう言いながら2人にボールを渡す。

「は？ ……ありがとう？」

「ふえ？ ありがとう…？」

2人は困惑しながらもボールを受け取った。

「よし、これでやっと全員パートナーを選び終えたようだな」
『だな！』

いつの間にか私の足元にいた”センキ”が言った。

「それじゃ、博士が戻るまでパートナーの紹介でもし合おうか!!」

「そうだな…?」

「ああ」

信司バカより先に覚醒かくせいした百合が提案をし、我と信司バカは賛成した。

8 パートナー選び（後編）（後書き）

手直ししたけど…結局何かアレなので、思い切ってゼニガメの名前
変えちゃったぜ！！

新名”センキ”！！

どうだっ！！

狩「……まあ、本人はセンキ気に入っているようだからいいと思うが」

そか。

んで、には手直ししたけど、結局ボツにしたシーンを載せてます

！！

狩「ほう…我がゲバをパートナーにしたあのシーンか」

うん。

グラコロが気絶した信司バカと百合を運んで研究所に戻った辺りから始
まります！！

狩「それでは、」

どぞ！！

「さつさと選ぶか… とは言っても、コイツだけしかいないがな」

そう言いながら、目の前の台に乗っている”ゼニガメ”を見る。

「ゼニ… ガメガ…」

「ゼニガメが”力”だ… この世の全ては”力だ”…」と言って
いた。

…そろそろ面倒になってきたので、ポケモン達が喋る時は始めから”『』”に訳を入れて入れておこうか。

『愛だろ何が何だろ何が、結局は”力”なんだろ!? ”力”があればなんだって出来るんだろ!? ”力”が全てなんだろ!? ……だったら、オレは最強になってみんなを見返してやる!! そして、どんなものよりも”力”が一番大事だって事を知らしめてやるんだ!!…!』

「…それは違うな」

『お前、人間なのにオレの言葉がわかるのか!?』

「ああ…」

『なら、オレのどこが間違ってるのか言ってみろ!!』

「それは… 我と一緒に来ればいつかわかるだろう」

『いつか”、か…』

「そうだ、”いつか”だ。その”いつか”は旅の途中かもしれないが、旅が終わった後かもしれない。さらに言うならば、お前が死ぬ時なのかもしれない。”いつか”とは、本当にいつかだな…」

『…』

「まあ、我は堅苦しいのは苦手だから… 気楽に行こうか」

『…気楽に、か…』

「ああ、気楽にだ」

『…決めた…』

「何をだ？」

『その、”いつか”わかるかもしれないオレの間違ってる所を知りたい！』
『そして、直す！！』

「……そうか」

『おう！！……後、名前知らないと不便だから教えてくれ！！』

「それもそうだな…… 我の名は狩牙、暗殺狩牙だ」

『”グラコロカリカリ”？ 変な名前だな』

「初めて会った頃の百合と同じ反応だな。……だが、我は”グラ

コロカリカリ”ではなく、”くらくらかりが”だ」

『わりいわりい。ちなみに、オレの名前は……』

「お前の名は……？」

『……いや、やっぱり狩牙が付けてくれ』

「ああ、わかった」

（30秒後）

「よし、決まった。今日からお前は”ゲバ”だ」

『”ゲバ”…… 気に入った！！ これからよろしくな、狩牙！！』

「ああ、よろしくな”ゲバ”」

ゼニガメ……もとい”ゲバ”が手を差し出してきたので握手をする。

「……はっ！？ ここは……？」

「んう…… ここはどこ？」

すると、狙っていたかのように気絶していた信司と百合の目が覚めた。

「む、起きたか。 お前らのボールだ、受け取れ」

そう言いながら2人にボールを渡す。

「は？ ……ありがとう？」

「ふえ？ ありがとう…？」

2人は困惑しながらもボールを受け取った。

「よし、これでやっと全員パートナーを選び終えたようだな」
『だな！』

いつの間にか私の足元にいた”ゲバ”が言った。

「それじゃ、博士が戻るまでパートナーの紹介でもし合おつか！！」

「そうだな…？」

「ああ」

バカ 信司より先に覚醒した百合が提案をし、我とバカ信司は賛成した。

9 パートナー紹介…後、戦闘

「オーキド博士の研究所」

狩牙だ。

今さっきまで、じゃんけんでパートナーの紹介をし合う順番を決めていた。

「まずは私ね！」

ポンッ！

百合がボールからフシギダネを出す。

「この子の名前は”フロウ”よ！！ ほら、2人に自己紹介しなさい！」

百合が”フロウ”を抱き上げながら言う。

『初めまして、フシギダネのフロウよ！ よろしくねー！』

「よろしくな！」

「よろしく」

我にははつきりところ聞こえるが、2人には”ダネダネー！！”としか聞こえていないだろう。

「次はオレだぜー！！ ヒートー！」

ポンッ！

信司がボールからヒトカゲの”ヒート”を出す。

「コイツはヒトカゲの”ヒート”！ヒート、自己紹介だ！」

『ぼくはヒート！よろしくね！』

「ああ、よろしくな」

「よろしくね！」

『アタシはフロウよ！よろしくね！』

ちなみに、百合はフロウを抱きながらヒートの自己紹介を聞いている。

「最後は我が… センキ、出番だ」

ポンッ！

我がボールからセンキを出す。

「ゼニガメの”センキ”だ。センキ、2人に自己紹介してくれ」

『おう！！オレはゼニガメの”センキ”だ！よろしくね！』

「よろしくね！」

『アタシはフロウよ！よろしくね！』

「よろしくな」

『ぼくはヒート！よろしくね！』

そんな感じでパートナーの紹介が終わり、しばらく旅の途中で何がしたいか話し合っていると…

ガチャ

「終わったか？」

「あつ、博士」

「どこに行ったの!？」

「じいさん、どこに行っていたんだ？」

どこかに行っていたじいさんが帰ってきた。

「ああ、ちよつとタمامシデパートでタイムサービスやってたから走って行ってきたのじゃ」

「買い物!？ しかも走って!？」

百合と信司のツッコミがハモった。

「それぐらい知らせてからにしろ」

「すまんのぉ」

「……まあ、いいだろう。 信司」

我が振り返りながら信司に話し掛ける。

「何だよ？」

「表へ出る」

「ええ!？ オレ何かしたっけ!？」

勘違いしているのか、信司が青くなりながらツッコミを入れた。

「何を勘違いしている？ せつかくもらったんだ。 バトルをしようではないか」

「あ、そーゆーことか」

納得した信司が手で”旦”の字を作る。

「それじゃ、外に行こっか!」

「ああ」

「おう!」

く 広場 く

「2人共、準備はいい?」

百合は戦闘には参加しないので、審判を務めることになった。

「ああ」

『いつでもいいぜ!』

我とセンキが返事をする。

「いいぜ!」

『いいよ!』

少し遅れて信司とヒートが返事をする。

「それじゃ、行くわよ!……戦闘開始!」

そして…我と信司、センキとヒートの戦いの火蓋ひふたが切って落とされた。

「ヒート、”引っ掻く”だ!！」

『わかった!』

「センキ、”引っ掻く”が来る前に”体当たり”で阻止しろ」

『おう!』

ヒートが爪を立ててセンキに向かって走り、センキはソレを阻止しようとヒートに”体当たり”を仕掛ける。

『そうはさせないっ!』

それを聞いたヒートが走る速度を速めた。

『だりゃあ!』

ドッ!

『かはっ…』

だが、ヒートの”引っ掻く”が炸裂する少し前にセンキの”体当たり”が炸裂し、ヒートが軽く吹っ飛んだ。

『つと…』

吹っ飛ばされたヒートはなんとか地面に叩きつけられずに着地し、体勢を整えた。

「ヒート、めげずにもう一度”引っ掻く”だ!！」

『うん!』

「こちらも”体当たり”で再び阻止してやれ」

『おつよ！！』

2人共再び同じ指示を出し、ヒートとセンキが走り出す。

『だりやあ！！』

『そこっ！』

『何！？』

ガリッ！

再びセンキがヒートに”体当たり”を仕掛けたその時、ヒートがレフトサイドステップで”体当たり”を避け、隙を見せたセンキにこんしん”引っ掻く”を炸裂させた。

『がつ！！』

それを避ける間も無くまともに喰らったセンキは軽く吹っ飛び、地面に叩きつけられた。

『くっ… やるな！』

センキは起き上がろうとしたが、起き上がれない。

『あ、あれ？』

『チャンスだヒート！ ”引っ掻く”！』

『言われなくても！』

ヒートが起き上がれなくなっているセンキに向かって走り出す。

『まずい… センキ、殻かめに籠こもって防御しろ！』

『お、おう…』
『たあ！』

ギャリッ！

センキが殻に籠った瞬間、ヒートの”引つ掻く”がセンキの殻に炸裂した。

『あつ…！』

だが、殻に籠っているセンキには全くダメージを与える事が出来なかった。

そこへ、追い打ちを掛けるようにその衝撃に耐えられなかったヒートの爪に亀裂が走り、ヒートは涙目になってしまった。

「今だ、殻から出る勢いでそのまま”体当たり”だ！」

『おう！！ だりやあああああ！！』

ドゴッ！

『がはっ！！』

センキが殻から出る勢いで強力な”体当たり”を炸裂させ、ヒートに大きなダメージを与えた。

トッ…

『か…は…っ…』

それをまともに喰らったヒートは大きく吹っ飛び、広場の杭に激

我と信司がそんな事をしている間にも、センキは自我を失っているヒートの猛攻をただひたすら堪えていた。

「……そろそろだな」

「何がだよ!？」

……突っ掛かってきた信司は無視する。

「今だセンキ、ヒートから距離を取れ」

『お、おう……』

今まで”逆鱗”により自我を失っているヒートの猛攻を堪え続けて傷だらけのボロボロになっているセンキが、ふらふらしながらもバックステップでヒートから距離を取る。

「死力を尽くせ! ”波乗り”だ!!」

『行くぜ!!』

センキが地中から大量の水を呼び出し、その波に乗る。

「見て! ゼニガメの特性”激流”が発動して、センキの”波乗り”が凄いことになってるよ!!」

「はあ!？ ……つて、なんじゃこりゃああああああああああああああああ!!?」

信司が半信半疑で波に乗っているセンキの方を見ると、センキが乗っている波が踊るが如く荒れ狂う激流になっていた。

『堪えに堪えて特性を発動させ、さらに死力を尽くして威力の限界を超えたオレの最強の”波乗り”を喰らいやがれえええええええええ』

傷だらけのボロボロで足下も覚束おぼつかないが、ガッツポーズをしている。センキに我は勞ねまいの言葉を掛ける。

「よく休んでいてくれ」

『おっ』

センキをボールに戻す。

「……さて、行こうか」

そう言いながら、信司の所へ駆け寄る。

「ヒート！」

信司が遠くに吹っ飛んでいたヒートに駆け寄る。

『……う……』

「お疲れ様。 ゆっくり休んでてくれ」

信司がしゃがんでヒートに勞ねまいの言葉を掛けながらボールに戻し、立ち上がる。

「グラコロ……」

「何だ？」

信司がちょうど来た我に話し掛ける。

「……また、バトルしようぜ」

「ああ」

「次は負けねーからなっ！」

「楽しみにしている」

「それじゃ、研究所に戻って回復させよっか？」

信司と再戦の約束をすると、百合も駆け寄ってきた。

「おう！」

「そうだな」

そして、3人で研究所へと戻って行った。

〈再び戻って研究所〉

「よし、そろそろ行こーぜ！」

「ああ」

「そうね！..！」

センキとヒートを回復させ、再び荷物を持って旅の準備をする。

「急な暴風と共にくる激しい足音には気をつけるんじゃぞ！..！」

「.....それはじいさんの事か？」

「ぴんぽーん」

「.....いい年して語尾に” ”を付けるな。」

〈1番道路前〉

「それでは、また会おう」

「おう、またな！」

「またね!!！」

こうして、我らの旅が始まったのであった…

9 パートナー紹介…後、戦闘（後書き）

ども、またボツシーン入れに来ました神技です!!

狩「狩牙だ」

今回は博士が帰って来た辺りから始まります!!

狩「それでは、」

どぞ!!

（狩牙の脳内）

じいさんが現れた!

狩牙LV10

こっげき

とくぎ

ポケモン

どうぐ

フルボッコ

……何故、某RPG風なんだ？
”にげる”の代わりなのは知らないが、”フルボッコ”は無いだ
らう。

こっげき

とくぎ

ポケモン

どろぐ

フルボッコ

どろぐ

傷薬×10

いい傷薬×5

元気の欠片×5

役に立たな草（略して役草 薬草）

×5

ポーション

火草×10

ニトダケ×10

大ル×10

拡散出 金×10

地雷×1

ファブリーズ×

核爆弾×1

閃玉×5

ブーメラン×5

妖の瓶×3

グラコロツール

マサキ×2

……何だこのどうぐは!?

最初の3つ以外は他のゲームのヤツだろう!!

「というか、”役に立たな草(略して役草 薬草)”とは何だ!?
どう使えと!?

……ポー ヨンは定番(?)だからまあ、いいとして……モ ハン多
すぎるだろう!!

大 ル 弾Gでも作れと言うのか!?

というか、大 ル 弾Gを作らなくとも地雷と核爆弾で終わりでは
ないか!!

大 ル 弾Gの意味がないだろう!?

というか、ファブ ーズはそんなにたくさん何に使うんだ!?

妖 の瓶って ルダか!?

というか、何故マサキ(ミュウツー)が増えているんだ!?

グラコロツール

N 0 1 何でもかばん

N 0 2 フーズシート

N 0 3 R S G ツクール

N 0 4 機神鋸【きじんのこ 斬刻きりきざみ】

N 0 5 ????

N 0 6 ????

N 0 7 ????

……よし。

「どこに行っていたんだ? 返答次第で地獄へ落とす」

ギラリ…

機神鋸【きじんのし 斬刻せんかく】の刃をじいさんだけが見えるようにちらつかせる。ちなみに、さっきの脳内コマンドはツツコミ含め5秒で終わらせた。

「あ、ああ… ちょっとタمامシデパートでタイムサービスやってたから走って行ってきたのじゃが…」

「買い物!?! しかも走って!?!」

百合と信司のツツコミが八モった。

「それぐらい知らせてからにしろ」

「メンゴメンゴ」

無言で機神鋸【きじんのし 斬刻せんかく】のギアを入れる。

ドウルルルン…

「何だ!?!」

「この音は何!?!」

「まさか… ま、孫よ?」

機神鋸【きじんのし 斬刻せんかく】のギアを入れる音に2人が驚き、じいさんが何かに気付いたのか我に聞く。

「何だ?」

「……ソレは何じゃ? というか、ソレでわしに何する気じゃ?」

「ああ、コレは我の”グラコロツールNo.4 機神鋸【きじんのし 斬刻せんかく】”だ」

「何ソレ!?!」

「そんなのあったの!?!」

「初耳なんですけど!?!」

信司と百合のツッコミコンボが決まり、最後は綺麗にハモった。

「ああ、そして…貴様を斬り刻む気だ!?!」

機神鋸【斬刻】を構える。

「……そうか。ならば、力の差を思い知らせてやるわ」

じいさんがその身に秘めていた膨大な闘気を解放する。

「行くぞ!?!」

「来い!?!」

機神鋸【斬刻】を右斜め上から振り下ろす。

「甘い」

ギヤギヤギヤギヤギヤ…

だが、じいさんは人差し指と中指の間で刃を挟み、回転を止める。

「博士す!?!」

2人が再びハモった。

「!?!んくらいは朝飯前じゃ」

「……そうですか……」

じいさんが軽く返し、またしても2人がハモった。

「くっ… ならば、これはどうだ!?!」

「ゴッ」

我が苦し紛れに懐ふところに隠しておいた”閃玉”を投げつける。

「パシッ」

だが、虚むなしくもキャッチされてしまった。

「ん? ……こ、これは…?」

何かに気付いたのか、じいさんがキャッチしたモノを見る。

「う い棒【グラコロバーガー味】”じゃ!?!”」

……どうやら、間違えて”う い棒【グラコロバーガー味】”を
投げつけてしまったようだ。

「何故に”う い棒”!?!」

今度は2人のツツコミがハモった。

……お前らさつきからハモり過ぎだろう。

「……じいさんよ」

「何じゃ?」

「ソレを返せ」

「ほい」

じいさんが我に”うい棒”を軽く投げ渡す。

「あっさり返した!?!」

さらに2人のツッコミがハモった。

……まだハモるか。

「さて、そろそろ行くとするか……」

「切り替え早っ!?! ってか、ちよつと待てよ!?!」

我が”うい棒”を懐にしまいながらそう言うと、信司がツッコミを入れてきた。

「何だ?」

「バトルs」

「断る」

「即答!?! ってか、普通逆じゃね!?!」

「確かに逆ね……」

我が信司の誘いに即答すると、信司と百合が触れてはいけない所に触れてきた。

「……仕方無いな。1戦だけ付き合っつてやるっ」

この調子では長くなる可能性があるのですが、仕方無く折れてやった。

「ありがとう!?! んじゃ、外でやるーぜ!?!」

「ああ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3524g/>

これってホントにポケモンすか!?

2011年5月21日06時53分発行